
まよチキ！ダブル！！

リプトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まよチキ！ダブル！！

【Nコード】

N4056Y

【作者名】

リプトン

【あらすじ】

オレ、庭渡^{ニワト} 理桜^{リオウ}は私立浪嵐学園で平和で平凡な生活を送っていた。だけど、幼馴染み兼親友で変な「体質」仲間のジローこと坂町^{サカマチ}近次朗^{キンジロウ}に巻き込まれ（？）、それを手放すことに……。あの時、ジローとさえ行動していなかったら……orzオレとジローは執事の秘密を知り、お嬢様に弱点を握られた。さまざまな女の子たちと過ごす学園ラブコメディー。（処女作なので駄作間違いなしですがそれでも良いと言う方は是非読んでください。）

プロローグ

―side ジロー―
幼馴染みで親友の庭渡^{ニフト} 理桜^{リオウ}と一緒に登校している。俺はこいつの事をリオと呼んでいる。

リオ「なあ、ジロー」

ジロー「なんだ？」

門の前にはリムジンが止まっており、そこには浪嵐学園の有名人二人が立っていた。一人はこの学園の理事長の一人娘である涼月^{スズツキ} 奏^{カナデ}。

リオ「なんでスバル様は執事なんてしてるんだろおな？」

リオはもう一人、燕尾服を着た近衛^{コノエ} スバル^{スバル}を指して、そんな疑問を投げてきた。

ジロー「今更な質問だな」

執事。そう、近衛スバルの職業は紛れもなく執事なのだ。あの燕尾服はコスプレなんかじゃないのさ。いや、ね。俺だって初めて聞い

たときは耳を疑いましたよ？ 執事って、なんだよそりゃ。冗談じゃない。なんでそんな職業がこの現代社会に残ってんだよ。しかも普通に高校に通いやがって。もういつそのこと天然記念物にでも――

リオ「メイドだよな」

ジロー「は？」

リオ「いやだって……スバル様って……やるなら執事じゃなくてメイドって感じだろ」

ジロー「はい？」

俺は幼馴染みで親友の言葉に思考を中断させ、目眩を覚えた。

ジロー「おい、リオ。大丈夫か？」

いくら、スバル様が女顔だからってそれは失礼だろ。

リオ「……オレは正気だ……と思いたい……」

リオは自信無さそうに言った。この時、俺はリオがおかしくなった
と思った。だが、それは俺のおおいな間違いだった。そう、放課後
に思いしらされることになるのだ。

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ・リオっちのプロフィールです☆

オリキャラ紹介

庭渡 ニワト 理桜 リオウ

(男)

身長 178 cm

体重 57 kg

容姿

- ・ 顔は中の上
- ・ 目と髪は灰色。学園時はカツラ（黒）十カラコン（黒）。
- ・ 髪型はツンツン。

特技

- ・ 家事全般
- ・ リフティング

趣味

- ・ 昼寝
- ・ 料理
- ・ 読書
- ・ サッカー

好きなもの

- ・ ホットケーキ
- ・ コーヒ
- ・ サッカー

苦手なもの

- ・ 女性

・同性愛

＊

・ 欧州系のクォーター。母親がハーフ。欧州系の血を強く色濃く受け継いでしまったので髪と瞳の色が灰色。目立つからと学園ではプチ変装している。

・ 名前は父（友理）の『理』と母（桜）の『桜』を合わせて付けられた。フルネームにコンプレックスあり。

・ とある事件に巻き込まれ、女性恐怖症となってしまう。

オリキャラ紹介（後書き）

リオ「ずいぶんと内容の乏しい紹介だな」

リプトン「そこはご愛嬌ってことで♪」

リオ「オレの性格とかは？」

リプトン「本編を読んでもらうしかないね」

リオ「いい加減すぎるだろ」

リプトン「しかたないんだって。ボクに文才がないんだから」

リオ「……はぁ……先行き不安だけどみなさん、こんなんですがこの小説をよろしくお願いします」

第1話

—side リオ—

ジロー「なあ、リオ」

リオ「なんだ、ジロー」

ジロー「どうしてこうなった？」

リオ「オレが聞きたいぞ」

オレたちは今、理科室に籠城し、小声で会話していた。扉の前には机やら椅子やらでバリケードが形成されていた。

リオ「……ただ一つ言えることは……」

ジロー「言えることは？」

リオ「アイツに捕まればdead end直行、間違いない」

不穏な会話をしているよな？ けどしかたないんだ。今、オレたち

はこの学園で敵に回してはいけないトップスリーに入っているであろうスバル様相手にリアル鬼ゴッコ中なのだから。なぜ、リアル鬼ゴッコをしてるかって？ ジローがスバル様のパンツを見てしまったらしいんだ。運悪くオレもそこに居合わせていたので追われてるんだ。それで、殴ると言うスバル様の家に代々伝わるデンジャラスな執事流記憶消去術から全力で逃れなければならない。捕まったら記憶どころかオレたち自身がデリートされかねないからな。ってか、オレはなんも見えてないのに！

ジロー「し、洒落になってねえぞ」

リオ「洒落じゃない。マジだ」

オレは近くにあった人体模型（通称ジョニー）でバリケードを補強

ドキヤッ！

——した瞬間、理科室に響く破碎音。ひどく嫌な予感を感じながら音のした方を見ると、そこには鮮やかに宙を滑空するドアの姿。スバル様がドアを蹴破っていた。様になってますねえ。

「「うおおっ！？」」

弾け飛んだドアをかわすオレとジロー。そして、がちやがちやと音を立てて床にぶちまけられるジョニーの内蔵たち。うわぁ、悲惨だ。

スバル「追い詰めたぞ」

ジロー「うらあぁあっ！」

理科室に入ってくるスバル様目掛けてジローは全力でジョニーをフルスイングした。だが、それも虚しく――

スバル「なめるな！」

怒号一閃。打ち込まれたスバル様の右ストレートがジョニーの首から上を吹っ飛ばしていた。サヨナラ、ジョニー。オマエのことは忘れないぜ。

ジロー「ふう……」

覚悟を決めたのかジローはゆっくりと拳を構えた。頭部をガード出来るよう両腕をしっかりと上げた構え。これはジローに最も向いたスタイル。そう、オレもジローもズブの素人ってわけじゃないんだな、これが。

スバル「やっとやる気になったみたいだな」

ジローに応えるように、スバル様もファイティングポーズを取った。ちなみにオレはなんも構えない。だって、逃げるために体力温存しときたいもん。

スバル「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナツクル』でな」

リ・ジ「……」

うわぁ、ダセエ。なんだよ、執事ナツクルって。

ジロー「どうでもいいけど、オマエってネーミングセンスないな」

スバル「なっ……何を言う！　かっこいいだろ！？　ほら、執事ナツクル！」

リオ「いや、かっこ悪いよ。執事ナツクル」

率直な感想を伝えてやると、スバル様は顔を赤くしてううっと唸っ

た。

スバル「くう……こんな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もう、許さないぞ。おまえたちには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

リオ「必殺技？」

スバル「そう、名づけて『エンド・オブ・アース』」

ジロー「スケールでえええっ！ 滅ぼしてんじゃん、地球うううっ！！！」

ジローの渾身のツツコミが決まった。

リオ「やっぱり、そのネーミングセンスはどうかと思うよ」

スバル「う、うるさいな！ ボクのネーミングにケチをつけるな！」

リ・ジ「……」

リオ「ごめん、オレたちが悪かったよ。オマエだって、一生懸命考

えたんだよな……」

ジロー「ごめん、俺たちが悪かったよ。おまえだって、一生懸命考
えたんだよな……」

スバル「ハモるな！　なんだその悟りきった顔は！　そんな可哀想
なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くそう……かつこいいと思ったのに……一週間もかけて考えたのに
……とスバル様は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。何？
この可愛い生き物……。

リオ「！？」

気付いた。スバル様の横にある棚。その上にある大きな硝子製のビ
ーカーが、今にも落ちようとしていた。

ジロー「避ける！」

ジローが反射的に体を動かしていた。不意に張り上げた声にスバル
様は口を開けてぽかんとしている。どさりとジローがスバル様を押
し倒した。そして、オレも落ちてきたビーカーをなんとか掴めた。

リオ「ふう……ってあぶねえ！？」

安堵したのも束の間、他にもあったビーカーが時間差で落ちてきていた。オレは咄嗟に避けた。ビーカーは呆気なく碎け破片が散らばっていた。

スバル「きゃああああああっ！」

リオ「なんだ？」

女の子みみたいな甲高い悲鳴。

ジロー「ごはあっ！」

振り向くとジローが宙を浮いていた。ビーカーの破片を避けるように理科室の床にダイブしていた。運の良いヤツだ。

リオ「ジ、ジロー？ オマエ、なんで鼻血が……」

ジロー「なっ、そんな、どうして……」

おかしいことに、顎を殴られたはずのジローは、なぜか真っ赤な鼻

血を出していた。ジローは女性に触られただけで、鼻血が出て、最終的には失神してしまうという稀有な体質な女性恐怖症だ。スバル様を見るとはだけた服からは案の定、胸が膨らんでいた。うん、確定だ。スバル様は女だ。やっぱりオレは間違ってたんだ！

スバル「――殺す！！」

スバル様が近くに置いてあった消火器を悠然と構えていた。

ジロー「ちょ、ちょっと待ってくれ近衛さん。そんなので殴られたら、記憶が飛ぶどころじゃすまない気がするんですけど……」

スバル「ああ、そうだ。おまえみたいな変態は、この世界にいちやいけないんだ……」

ジロー「じつ、事故だ！ あれは事故だったんだ！」

スバル「何が事故だ。ボクの……ボクの胸を触って興奮して鼻血まです出したくせに……！」

ジローは腰が抜けて動けないようだ。

ジロー「違うんだって！俺は興奮して鼻血を出したわけじゃない！これは俺の身体が――」

スバル「問答無用。終わりだ。絶望を噛み締めながら、死ぬがいい」

ごんっ

鈍い音がしてジローが倒れた。スバル様はそれでも気がすまなかったのか連続でジローに消火器をぶつけ続けていた。

スバル「次はおまえの番だ。庭渡 理桜。覚悟しろ」

気がすんだのかターゲットがジローからオレに移ったようだ。いつものオレならスバル様がジローに気をとられてる間に逃げているはず。だけど、オレの身体は震えて言うことをきかなかった。

『さあ、僕。お姉さんと愉しいことしようね』

迫り来るはだけたスバル様の姿がオレの中の忌々しい記憶と重なってしまっていたから。

第2話（前書き）

紫苑さん感想ありがとうございます。

第2話

スバル「可哀想に……そんなに震えなくても大丈夫だ。一瞬で終わらせてやるからっ！」

そう言い、オレ目掛けてスバル様は全力で消火器をフルスイングした。

リオ「くっ……！ はぁ……はぁ……チ、クシヨ」

オレはなんとか頭をガードしたが威力が強すぎて吹っ飛ばされた。不幸なことにビーカーの破片のあった場所にダイブして腕をぱっくり切ってしまった。

スバル「……運の悪いやつだな。今ので気を失っていたらよかっただろうに」

本当に運が悪い。オレは切った左腕をきつく握りしめる。くそっ、頭が痛い……呼吸がしづらい……。

リオ「……た、たのむ……はぁ……」

くそっ、最悪だ。学園じゃ『ごう』はならないように気を張り続けているのに!?

スバル「なんだ? 命乞いか?」

リオ「たのむ、から……はやく、ふくをととのえて、くれ!! はあ……はあ……」

今、オレが出せる渾身の声を出すと、スバル様は自分がどんな格好をしているのか思い出してくれたのか急いで整えてくれた。

スバル「……見たな」

整え終わるとスバル様は親の仇を見るような目をしてそう言った。オレは見せられた側なんですけど!?! ……ああ、でもいっそのこと意識をぶっ飛ばされた方が楽だ。

スバル「おまえもあいつみたいにしてやるからな!」

スバル様が消火器を振り上げた瞬間、どこからともなく声がした。

「そこまでよ」

凜とした声が響いた。声のした方を見ると、スバル様の主である、涼月奏さんがいた。

スバル「お嬢様！！」

奏「スバル。消火器を置きなさい」

スバル「ボクにはこいつらを殺す義務が――」

奏「スバル」

スバル「……わかりました」

主の命令には逆らえないのか、スバル様は渋々、消火器を床に置いた。

奏「そっちの坂町くんは大丈夫かしら？」

リオ「はぁ……はぁ……ジローなら、むだに、がんじょに、できて、るから、だいじよぶだ」

伊達にあなたのお方に鍛えられてないからな。

スバル「お嬢様。どうしてここに？」

奏「お花を摘みに行ったあなたがなかなか戻らないから、何かあったんじゃないかと思って捜しにきたのよ」

涼月さんがそう言うのと、スバル様は申し訳なさそうに頭を下げた。

奏「庭渡くん、腕、大丈夫かしら？それに顔が真っ青よ」

リオ「……だいじょぶ、だよ」

嘘だ。かなり痛い。言葉も上手く紡げない。身体の震えも頭痛も収まらない。オレはネクタイをはずし、腕に巻こうとしたのを止められた。

奏「駄目よ。そのままだといけないから保健室で消毒しましょう」

リオ「……ほけん、しつ、いくまでのあいだ、だけでもしけつ、し

たい。ジローも、はこば、なきやいけな、いし」

奏「そう、それなら私が――」

リオ「!？　　いらない！　　じぶんでやるからオレにさわらないでくれ！」

涼月さんがオレの手をとろうとしたが咄嗟に怒鳴ってしまった。

スバル「おまえ、お嬢様に向かって！」

奏「いいわ、スバル」

スバル「ですが！」

食って掛かるスバル様を涼月さんが手で制してくれた。

リオ「……悪い。オレを心配してくれてるのはわかるけど、今は逆効果なんだ。だから、放っておいてくれ」

だいぶ呼吸が落ち着いてきたから普通に話せるようになった。オレ

はワイシャツを脱ぎ、傷口にハンカチをあて、その上からネクタイをきつく巻いた。

奏「それはできないわ。私の執事があなたに怪我をさせた。それく
らいの責任はとらせてもらわないと」

リオ「……わかった。なら、保健室に行こう。オレも聞きたいこと
あるし、そっちも聞きたいことあるんだろうし」

奏「話が早くて助かるわ」

オレはジローが汚れないように血塗れになった手をワイシャツでく
るみ、ジローを抱えて保健室へ向かった。

♂×♂

リオ「失礼します」

奏・ス「失礼します」

ジローを抱えたまままで保健室の扉を開けるオレに涼月さんとスバル様が続いて入る。

仲本「どうぞー……って、庭渡君、どうしたの！？それに坂町君も！？」

リオ「……とりあえず、ベッドを借りてもいいですか？」

仲本「いいから早く坂町君を寝かしてこっちに座って！」

リオ「はい」

仲本「何をしたらこうなるの！？ 顔の方はたいしたことはないけど……腕の方は何針か縫わないといけないわ！ 今すぐ病院に行かないと！」

リオ「……病院は行きたくないです」

仲本「あなたの病院嫌いは知っているけど、今はそんなこと言うてる場合じゃないでしょ！？」

奏「……少しよろしいですか、仲本先生？」

仲本「なにかしら？　今は庭渡君の手当てを——」

奏「彼らは私に任せてもらえませんか？」

仲本「けど……え？　——きゃあ♪」

リオ「え？」

涼月さんはあろうことか仲本先生を往復ビンタした。……それも札束で……。どういうことだ？　あの浪嵐学園男子の憧れの涼月奏が……。ヤバイ、目眩が……。

奏「さて、邪魔者は退散したわね」

スバル「……お嬢様……」

オレがトリップしてる間に仲本先生は保健室から出ていったみたいだ。うん、ジローには悪いがオレも退散しよう。オレはそう決めた行動に移ろうと出口へ向かった。

だきっ

リオ「ひいっ!？」

突然、後ろから抱きしめられたことに情けない声を漏らしてしまった。背中に殺傷能力最大の二つの凶器が押し付けられてるんですけど!？ やばい……全身に悪寒が……。

奏「どこに行くつもりかしら？」

涼月さんがオレの耳元で囁くようにそう言う。うわっ!？ ゾクゾクするう！

リオ「ちょ、ちょっと……かばんをとりー」

あ、もうムリだ。うん。むしろここまでもったことに驚きだよ。よく頑張ったな、オレ！

スバル「え？ お、おい！」

限界を突破したようでオレの身体から力が抜けて、糸が切れた操り人形のように呆気なく倒れた。慌てるスバル様の声を聞きながらオレの意識はブラックアウトした。

第3話（前書き）

お気に入り登録してくれた皆様ありがとうございます。

第3話

リオ「く、来るなあああ！」

唐突に意識が覚醒した。横になりながら、ばくばくと拍動する心臓を左手で押さえつける。そう、あろうことか自分の上げた悲鳴で目を覚ましていた。カッコ悪すぎる。

リオ「……なんて、サイアクな目覚めだ」

サイアクだ。あの悪夢を見るなんて。

リオ「うゝ……っ!？」

や、ヤバい!？ 胃からリバーシ信号が!! 周りを見るとゴミ箱を発見した。すぐに取りないと。俺はすぐさまゴミ箱を取ろうと右手を動かした。――だが、突然、ジャラっと言う音と共に、右手の動きが止まる。

リオ「……ジャラ？」

これって、手錠……ですよね？ なぜにオレの右手とベッドの柱を

しっかりと恋人同士のように繋いでるんだ？ オレ、拘束プレイはあまり好きじゃないんですけど？

リオ「……………」

えーっと、なんですかね。ひょっとして、オレはまだ夢を見ているのか。そんなことはとりあえずどうでもいい！ このままじゃゴミ箱が取れないじゃないか！？

リオ「…………っ!？」

マズい！ リバース！ リバース信号が赤になりかけてますから！
！ マジで喉まできてますからあ!!!!!!

「リオ、早くこれに吐け！」

そんなジローらしき声の言葉とともにゴミ箱がオレの目の前に出現した。オレはゴミ箱をしっかりと持ってリバースを行った。

リオ「…………ゲボツ、ゴホツ…………!!?」

ジロー「二人とも悪いけど」

「わかってるわ」

誰かが出て行く気配がしたけど、今のオレには気にする余裕はない。

ジロー「全部出して楽になれ」

ジローはオレがこうなるのに慣れてるから優しく背中を擦ってくれる。やはり持つべきものは幼馴染みで親友か。

ジロー「もう、大丈夫か？」

リオ「あ、ああ」

あれから十分くらい吐き続けたか……。事後処理も終え、ジローが窓を開けながら心配そうに訊くので、力ない笑みで返す。

ジロー「そうか。……涼月、近衛。もう大丈夫だから、入ってきてくれ」

涼月さんにスバル様？　　なんであの二人がオレの家に……って、こ

こは俺の家じゃなく、オレが意味嫌う病室じゃないか。

奏「庭渡くん、大丈夫？」

スバル「……」

ジローが呼んだ人物が入ってきた。スバル様は気まずいのか無言だし。

リオ「……ジロー」

ジロー「リオのことを頼むよ。俺は何か飲み物、買ってくるから」

ジローに状況説明を頼もうとしたがあらうことか目線を反らし、出て行きやがった。

奏「スバルも行ってきて」

スバル「かしこまりました」

涼月さんに言われ、スバル様はジローを追いかけていった。待つ

てくれ！　ちよっ！？　オ、オレを女の子と二人っきりにしないでくれえ！！

奏「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？　サイズ的には小さくないと思うんだけど」

リオ「……ん？」

ちよっと待て。この女、今何気にとんでもないことを言わなかったか？

奏「安心して、庭渡くん。手術は、無事成功したわ」

リオ「……なに？　それならオレも改造人間の仲間入りなのか！？」

奏「そうよ。あなたはもう普通の人とは違うわ。試しに『変身っ！』って叫んでみて。それであなたに秘められた力が解放されるから」

リオ「な、なんだと！？　よ、よし！　わかった！　いくぞ！　――って、やるわけないだろ！？」

オレは途中まで合わせていたがさすがにその先はないだろ？　恥ず

かしすぎるって。高校生にもなって「変身っ！」とか叫んじゃったらさ。そんなヤツがいるなら是非見たいね。

奏「く、あはは……」

笑い声が聞こえる。信じられないことに、あの涼月さんがお腹を押さえて、窒息死しそうなくらいに悶えていた。

奏「く、ふふふ。いいノリツツコミね」

コイツ、本当に涼月奏さんなのだろうか？　いつもとは印象が違すぎるんですけど……。

奏「でも、残念だわ。ジローくんみたいに叫んでくれると思ったのに」

……あ、いたんだ。しかも、かなり身近に。さすがだな、ジロー。オレはオマエを侮っていたよ。

リオ「あ、あの……涼月さん？　ちよつと訊いてもいいか？」

奏「ふふ、何かしら庭渡くん。それともクラスのみんなみたいに『

リオ『 って呼んだ方がいいかしら? 』

ジロー「別に呼びやすい方で呼んでもらって構わないけど……」

奏「ありがとう、リオくん。訊きたいことはいっぱいあるでしょうから、ゆっくりでいいわよ」

リオ「じゃ、じゃあ、訊くぞ? オレのことを繋いでのって、アンタ? 」

奏「そうよ。あ、心配しないでね。私だって怪我してる左手一本のあなたに犯されるつもりは毛頭ないから」

ジロー「アンタはオレをどんな人間だと思ってんだよ! そんな心配してねえよ!! 」

誰がそんなことするか! 悲しいがオレにそんなことできるわけねえんだよ。

リオ「……そういや、手術って本当にしたのか? 」

オレは丁寧に巻かれた包帯を見て呟く。

奏「ええ。ここは涼月家が経営してる病院だから最高のスタッフにやませたわ。傷痕は残らないから安心して」

リオ「そうか、なんか面倒掛けたみたいで悪いな。治療費は後で必ず返すよ」

奏「いらないわ。あなたが私のお願いを聞いてさえくれれば」

涼月さんは静かに口唇を歪めた。……怖っ！　なんかすんごい怖いんですけど……！！

奏「そうね、最初はもちろん去勢——」

リオ「待った！　何が望みだ涼月さん！　俺にできることならなんでもするぞ！」

認識を改めよう。コイツ、ただのお嬢様じゃない。ただのお嬢様が、こんなふざけた性格してるわけがない……！　ってか、お願いが去勢っておかしいだろ！？　しかも、もちろんって言ったぞ！

奏「勘違いしないで。あなたが私にできることなんて何もないわ」

はつきりと涼月さんは断言した。いや、まあ、そうなんですけどね。オレが何かできるだなんてこれっぽちも思えませんでしたけどね、本当。

奏「あなたを拘束しているのは、あなたが私の執事の秘密を知ってしまったからよ」

ああ、やっぱりか。コイツとスバル様がいる時点で薄々そうじゃないかって思ってたんだ。

第4話（前書き）

KENさん、感想ありがとうございます。

第4話

リオ「なあ……なんでスバル様って男の格好で学園に通ってるんだ？」

一番の疑問を訊ねた。コイツなら、全て知っているはずだ。否、知らないはずがない。なんたってスバル様の主なんだから。

奏「強いて言うなら、家庭の事情ね」

リオ「家庭の事情？」

奏「ええ。あの娘の……スバルの家系の男子は代々私の家に執事として仕えてきたの。だから、あの娘も執事をしているのよ」

家系の男子？　ってことは、スバル様は……。オレの中である答えが導き出された。

リオ「そうか。それならしかたないか」

奏「あら？　これだけで納得できたの？」

涼月さんが意外そうに訊いてきた。

リオ「納得はできない。だけど、家庭の事情なんだろう？ スバル様とあまり親しくもないオレが深く訊いていいことじゃないだろう」

奏「それもそうね。話を戻すけど、私の父——つまりこの学園の理事長が、スバルが私の執事である為の条件を出したのよ。その条件が、三年間、誰にも女だと知られずに学園生活を終わるというもの。つまりそれくらいのができないようじゃ女に涼月の執事は務まらない。きつとそう言いたかったんでしょね」

リオ「……え？ ちょっと待った。それってつまり……」

奏「そう。スバルは今日、あなたたちに自分が女であることを知られてしまった。あの娘は自分が涼月の執事であることに並大抵じゃない拘りを持ってるの。だからあなたたちの口をどうにか封じようとした。……ごめんなさい。私の執事が迷惑をかけたわ」

リオ「……」

そうだったのか。だから、あんなにオレ達を殺そうと必死になってたんだ。いや、だけど、あれはれっきとした殺人未遂だぞ。犯罪者になったら意味がないだろ。

ジロー「ほら、近衛。早く行けって」

スバル「だ、だけど……」

リオ「ん？」

ドアの方を見るとジローとスバル様がなんか押し問答していた。

リオ「何してんの？」

スバル「……あ、あの！？」

リオ「なに？」

スバル「ご、ごめんなさい！」

リオ「は？」

スバル「あのときは動揺してて……本当に悪気はなかったんだ。そ

の、だから……怪我をさせてごめんなさい！」

リオ「……」

おいおい、あのスバル様がオレに向かって頭を下げてるぞ。ゲキレアじゃね？

リオ「……イヤだ」

オレは低い声で呟いた。

スバル「え？」

リオ「……ジローは見たところ傷がなさそうだけど消火器で頭を殴られてるんだ。この後、どうなるかわからないんだぞ。眠ったら、二度と目が覚めないかもしれない」

ジロー「怖いこと言うなよ」

リオ「それにオレはこのザマだ。謝っただけで済まそうなんて虫が良過ぎるだろ」

スバル「えっと……それは、その……」

リオ「こっち来いよ。一発で済ませてやるから」

オレが拳を作るとスバル様はビクツとするが、覚悟を決めたのかオレの腕が届く距離に来了。流石は男装執事だな。

リオ「良い度胸だ。……いくぞ！」

スバル「……ッ!？」

スバル様は齒を食いしばってる。

スバル「……?」

だが、覚悟した衝撃が来ないことに目を開けて首を傾げる。

ッ
パシンッ! ヽ

そんなスバル様にオレは渾身のデコピンを放つ。

スバル「いたっ！」

リオ「ほら、今回はこれで赦してやるよ」

スバル「?.....??」

スバル様は額を両手で押さえて不思議がっている。ドチクショー！
メチャクチャカワイイんですけど。

リオ「だから、今回はデコピンで赦してやるって言ってんの。けどな、いくら秘密を守るためだからって暴力に走るのは止めろよ。次やったら、本当にぶん殴るからね！」

スバル「う、うん」

リオ「わかったならよし！」

、ナデナデ、

オレは安心させるように笑顔でスバル様の頭を撫でる。おーやっぱ

り、女の子の髪だー。撫で心地最高だな。

スバル「!?!?!」

ジロー「リオは相変わらず女に甘いよな」

オレとスバル様のやりとりを見て、ジローは呆れ気味でそう言った。

リオ「親父と母さんからの教えを破るわけにいかないからな。女性には優しくあれってな。暴力なんてもつての他だ」

奏「……ふうん……」

リオ「な、なに? どうし——」

静かだと思った涼月さんが目を細めてオレを見ていた。やな予感があったので涼月さんに訊こうとしたら……あろうことか、涼月さんがオレの腰辺りに馬乗りしてきた。

リオ「!?!」

呼吸が止まる。軽い。鳥の羽のようだとまでは言わないけど、涼月

さんの身体は思ったより軽かった。

リオ「……ちょ、ちょっと！ 何してんですか、アンタは！？」

奏「なについて、リオくんに馬乗りしただけよ」

長い見とれるくらいに綺麗な髪をいじりながら、涼月さんは昼下がりのコーヒーストレイクのごとく落ち着いてらっしゃる。対するオレは酸欠寸前の金魚みたいに口をパクつかせていた。というか酸欠ツス！

奏「リオくん。あなたって、特殊な体質らしいわね」

ギクッ

奏「ねえ、黙っているつもり？」

涼月判事による臨時裁判が開廷。被告人はもち、オレ。こうなったら黙秘権だ。拘束されて動けない以上、屍のように無口になってこのピンチを乗り切るしかあるまい！

奏「別にいいわよ。それなら——身体に直接訊くから」

リオ「は？」

驚くオレの腰の上で、彼女は口元を歪めた。その白い指がオレのシヤツのボタンを次々と外していく。

リオ「お、おい！　なんで服を脱がすんだよ」

ヤバイ、ヤバイ！　発作が！　頭痛えし、呼吸が！！　身体が尋常じゃないほど震えてますからあ！！

奏「静かにして。手元が狂って内蔵を傷つけちゃうかもしれないでしょう」

リオ「さりと、こわいこと……いうなや！」

奏「ちなみに、私の握力は片手だけで八十キロを超えるわ」

リオ「あきらかに、ウソ、ですよね！」

呼吸しづらい上に大声出してるせいかメツチャ体力がなくなってる

ような気がする。

奏「ふふ、バレちゃった。でも、大丈夫。私の家に代々受け継がれた拷問法の中に、肋骨を一本ずつ――」

リオ「やめっ！ わかった！ もう……わかったから、オレにふれる、のは、やめて、くれませんかねえ……っ！」

魂を込めた絶叫も、無情にも涼月さんには届かなかっただけのシャツの隙間から、白い指がオレの肋骨の上をへびみたいに進んでいく。細い指先。冷ややかなその体温に、心臓が跳ねた。

ドクンッ！

――あ、ヤバい、マズい。体温が急激に下がっていく感覚の中、涼月さんに触れられた箇所だけが熱を持った。……はい、アウトォー！

第5話（前書き）

あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます。

第5話

奏「え？」

涼月さんの唾然とした声が漏れた。そりゃそうだろう。自分の触れた所だけが異常に赤くなり、火傷するほどの熱を帯びているのだから。ちなみに、オレは脱力感からボ～とした感じで涼月さんを見ている。しかも、蕁麻疹が出たところが異常に痒い。

奏「……本当にジローくんの言う通りだったのね。ジローくんのもだけど、アレルギーだとしたら訊いたことがない症状よね」

リオ「って、しってて、はあはあ……やった、のかよ……」

奏「だって、確かめる必要があるでしょう？ 激しい頭痛、身体の震え、過呼吸、蕁麻疹。ひどいときは戻してしまうんでしょう？ 女の子に触れられただけでこんな症状が出るなんて信じられなかったのよ」

この人は悪魔か？ いや、そんなカワイイもんじゃないな。魔王だ。これからはサタン涼月と呼ぼう。

リオ「……ジロオ、オ、マエ#」

ジロー「……しかたなかったんだ」

リオ「しかたないで……はあ……すますな。　はあ、もういい。ジロー、から……オレのことは、きいたんだろ？　あえて、オレか、らは……せつめいしない、からな」

奏「ええ。つまり、こういうことでしよう。あなたは、女の子に触れられるのが怖くて怖くて仕方がないチキン野郎なのね」

リ・ジ「ぐ……」

グサツと心臓にナイフを突き立てられた気分だった。ジローも同じのようだ。歯に衣を着せないタイプだな。直球過ぎません！？

奏「ねえ、そうでしょう？　庭渡　理桜くん」

リオ「！？」

こ、このタイミングでフルネームだと？　ま、まさかこの人……気付いたのか？　オレの名前の秘密に……！　いや、そんなはずない。オレのはジローみたいにストレートじゃない。わかるヤツはよっぽ

ど性格がヒネくれてる。

奏「どうかしたの？ 何か言ってよ、庭渡 理桜くん」

リオ「……」

奏「ニワトリオウくん？」

リオ「……」

奏「ニワトリ、オウくん？」

リオ「……」

奏「チキングくん？」

リオ「うわあああああつ！」

耐え切れずに、オレは絶叫していた。

スバル「チキング？」

リオ「ヤメロ！　そのんで、オレをよぶなっ！」

ジロー「リオも俺と同じなんだよ。庭渡理桜。ニワトリ、オウ。ニワトリを英訳すると？」

スバル「……チキン……」

ジロー「オウは王様でキング。それを合わせてチキング。曲解だけど、チキンの王様だ」

オマエだけには言われたくないわ、ジロー！

奏「ところで、リオくん」

急に涼月さんの雰囲気が変わった。

奏「あなた、自分の恐怖症を治したいとは思わない？」

リオ「……そりゃあ、オレだって……はあ……なおしたいよ」

この体質が治らない限り、オレのささやかな夢も叶えられないからな。

奏「だったら、手伝ってあげましょうか？」

リオ「それは、ありがたい、けど……。なにが、のぞみだ？」

奏「リオくんは頭の回転が早いのね」

リオ「どうも。で？」

奏「スバルが女の子だってことを、誰にも言わないで欲しいの」

たとえば死んでもね、なんて物騒な言葉が付け足された。要はオレがスバル様の秘密を死守する代わりに、涼月さん達はオレの女性恐怖症を治す手伝いをしてくれるってな。

奏「あなたたちがスバルの秘密を知ってしまったことは、まだ父の耳に入っていない。あなたたちが秘密を守れば、私たちが条件を破ってしまったことを知られることはないわ」

リオ「いいふらす、しゅみなんて……はあ……ないけ、どさ……メ
チャ、ふせい、はあはあ……ですよね？」

奏「バレなければいいのよ。どう？ 私たちと協定を結ぶ？ ちな
みにジローくんは協定済みよ」

リオ「きょうてい……はあはあ……って、いうより、きょうはんだ
な。でも、ことわったり、したら……はあはあ……ふじの、じゅか
い、いき、だろうし……オレたちが、スバルさまの、ひみつを……
バラしたら、オレたちが、バラされるんだろうし……」

もう、喋るのもしんどい。つか、早く退いて欲しいんですけど。ジ
ローにアイコンタクトをする。

ジロー「……リオも涼月の話に乗るって。リオ、近衛は主の命令に
従うらしいぞ」

リオ「おう」

ジローはオレの気になってることを言ってくれた。なら、安心か。

奏「ふふ。じゃあ決まりね」

なぜか涼月さんはやけに楽しそうに笑っていた。うん、やな予感しかしないよ？

奏「ところでリオくん。訊きたいんだけど、あなたの女性恐怖症の症状ってどんな時に出るの？ 出てからも女の子に触られ続けたらどうなるの？」

リオ「え？ ん、しょうじょうがでるのは……ふいうちで、ふれられたときと……ちょじかんで、きよくどの、せっしょくじ、かな？」

それと、言わないけど半脱ぎで迫られたりしたらマジでヤバイね。触れてないのに発作が出るからな。これだけはジローよりもチキンなのを認めよう。

ジロー「さわられつづけると、たえきれなく……なってしっしんするね」

ジロー「……リオ、ご愁傷さま」

事実、保健室で涼月さんに抱きつかれて失神したしな。それとジロー、なに手を合わせて不吉なことを呟いていやる！

リオ「けど、それがどう——」

と。そこまで言ってオレは黙った。正確には黙らせられた。涼月さんの指が、再びオレの肋骨に伸ばされていた。

リオ「あ、あの、すすつきさん？」

奏「心配しないで、リオくん。これは実験よ。今後の為にも、あなたの身体がどこまで耐えられるのか試さなくちゃいけないの」

三日月のように笑うサタン涼月。ヤバイ。コイツ、明らかに面白がってやがる。

リオ「や、やめっ！ そんな、ことしなくても……ふ、ひあんっ！」

奏「うふふ。ちょっと触っただけなのに可愛い声を出すのね」

細くて長い指がわきわきと肌の上を這いずり回っていく。……ダメだ。傍から見れば天国のようなシチュだが、女性恐怖症——チキン症候群のオレにとってはただの拷問だ！ 視界はすでにブラックアウト寸前。このままだったら魂があのだ世へ旅立つ。

リオ「た、たすけて、くれ、ジロー！ スバルさま！！ このまま、
じゃ……ホントに、ムリ！」

掠れた声で精一杯、二人にSOSを出す――

ジロー「スマン、リオ。俺には荷が重い……」

スバル「……ボクは執事だ。お嬢様の命令は絶対なんだ」

目を反らされた。

リオ「そんなこと、いわずに！ たのむから……オレを、みすてな
――ひゃああんっ！」

奏「あら、リオくんったらこんな所に切り傷があるのね。それにジ
ローくんの家族に鍛えられてるだけあって身体が締まってる。これ
なら、失神した後も楽しめそうね」

うふふっ、と響き渡る笑い声。何を楽しむつもりなんだよ！
……ああ、今日からこんな生活がオレの日常になるのか。徐々に遠
のいていく意識。その中で、オレは神様に自分の貞操の無事を祈っ

て
お
い
た。
。

第6話（前書き）

今回は少し短いです。

第6話

どんなに暗い夜もいつかは明ける。どんなに明日が嫌でも朝はやってくる。そんなわけでオレは自分の部屋の時計を見た。ただいまの時刻は朝の六時半。うん、いつもの時間だ。……それより、オレはどうやって家に帰ってこれたんだ？ まあ、気にしちやいけないよな。

リオ「ん？ 雨か」

窓の外からは雨音。昨夜までは降っていなかったが、今朝の天気は俺の心の中のように憂鬱らしい。

リオ「……シャワーでも浴びてさっぱりとするか。昨日のままみただし」

自分の格好を見ると制服のままだった。カツラもカラコンも着けたままかよ。カラコン着けたまま寝るのって怖いんだけど。とりあえず、タオルと着替えを持って脱衣所へ向かう。

リオ「……毎日、かったるいんだよな……」

鏡の前に立ち、カツラとカラコンをはずす。すると、本来の自分が

鏡に映る。灰色の髪に灰色の瞳。目立つよな、これ。母さんが欧州系のハーフだったんだけど、その血を強く色濃く受け継いでしまったらしい。顔は親父似なんだけどな。この姿を知るのは学園ではジローとジローの妹である紅羽^{クレハ}。そして中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁の黒瀬 ヤマト《クロセ ヤマト》。この三人だけだ。

リオ「気合……入れねえとな」

自分に言い聞かせるように呟いた。心機一転して気持ちを引き締めないと。なにせ、今日から始まるのだ。涼月奏による、オレたちの治療プログラムが……。昨日の病室。あのときはなんとか無事に切り抜けた……。はず。だが、もはや学園に心の休まる場所はない。つまり、この家だけがオレの最後のオアシスだ。ならば、せめてこの安息だけは噛み締めねば。

リオ「さて、早くシャワー浴びて、朝食作んねえと」

オレは服を乱雑に脱ぎ捨てて浴室へ入った。

♂×♂
♂

リオ「……ん？」

ピンポーン、

脱衣所で濡れた髪をタオルで拭いていると呼び鈴がなった。こんな朝から誰だ？ ジローか？ なら、このままでいいか。

ピンポン×5、

リオ「だぁー！ 聞こえてるっての！！ しつこいぞ、ジ、ロウ？」

バンッ！、

玄関を勢いよく開ける。

リオ「……」

オレは言葉を失う。そこにいたのはチキン・ジローなんかじゃなく、クールビューティー涼月奏がいた。

奏「……／＼／＼」

なぜか涼月さんも沈黙していた。しかも、心なしか頬が赤く染まっていた。……状況を確認しよう。呼び鈴を押したのはジローではなく涼月さん。そして、ジローだと勝手に判断したオレは、シャワー

を浴びた後だから 上半身裸で頭にタオルをかけている。……うん、涼月さんの頬が赤くなる理由はわかったよな、オレ。

リオ「……きゃああああ!? / /」

気がついたら、オレは女の子のような悲鳴をあげていた。

♂×♀

奏「く、あはは……。さっきの悲鳴……。く、ふふふ。女の子みたいで。リオくん、可愛いかったわ……。あは、あはは。」

リオ「そ、そんなに笑わなくなったっていいだろ! / /」

涼月さんが笑い泣きをしていた。オレは半泣きで怒鳴っていた。

奏「あ、あはは……。だ、だって……普通、悲鳴をあげるの女の子である私の立場なのに……」

／／
リオ「しかたないですね! オレ、裸見られたんですけど!! /

奏「いいじゃない。昨日も見たわけだし。減るものでもないんじゃない。」

リオ「減る！なんか大切なモンが減りますからあ！」

なんでだろう。この人には恥じらいと言う言葉がないような気がしてならないんです。さっき、頬が赤くなったのは、オレの気のせいだったんだ。

奏「大丈夫よ」

リオ「なにが？」

奏「……………」

リオ「……はあ……もういいよ。それでこんな朝っぱらからなんの用？」

なにが大丈夫かわからんけど、これ以上は疲れるから話を変える。

奏「これからあなたたちが秘密をバラさないように、できるだけ監視することになったの。それで見張りながら一緒に登校しようと思っ
てね」

リオ「涼月さん直々に？　　そういうのってスバル様にやらせるもん
じゃねえの？」

奏「スバルはジローくんのところよ」

リオ「なるほど。ジローってよっぽど信用ないのな」

奏「……そういう訳じゃないんだけどね。色々あるのよ」

オレの言葉に涼月さんが困ったように言った。

リオ「ふうん……ま、深くは聞かないけどな。ところで涼月さんは
飯食べてきてるんだよね？」

奏「食べてないわ。リオくんのところでご馳走になろうと思ってね」

リオ「別にオレは構わないけど。涼月さんの口に合うかは知らない

ぞ」

そう言い、涼月さんの前にいつもの朝食を出し、涼月さんの向かいに座る。

「兄さあ〜ん！ あっさだよ〜〜〜っ♪」

ドカンッ！、

突然、爆竹みたいな声が轟いてきた。相変わらず朝からテンションの高いな。

紅羽「うりゃあああっ！」

ジロー「ぐぶはっ!？」

紅羽「おはよっ兄さんっ！ えーい、アンクルロック！」

ジロー「ぎきゃああっ！」

紅羽「さらに続けてSTF！」

ジロー「ちょ、まっ……ぎにゃあああっ！」

紅羽「さらにそこからのチョークスリパー！　そしてトドメの腕ひしぎ逆十字い！」

ジロー「ぎゃああああっ！」

ジローの悲鳴と紅羽の技名が響き渡る。うん、いつも通りの朝だな。目の前にいる涼月さんは驚いたような呆気に取られたような顔をしていた。まあ、初めてだとそうなるよな。

第7話（前書き）

リオ「更新したぜ」

第7話

奏「ところで」

リオ「ん？ 何？」

食べ終わった二人分の食器を洗っていると、コーヒーを優雅に飲んでいる涼月さんがそう言った。

奏「その姿はなにかしら？」

リオ「何って？ エプロン姿のこと？ 料理するときや洗い物するときには普通じゃないか」

オレは自分のエプロンを見て、首を傾げた。そんなにオレってエプロン似合わないかな？ って、男のエプロン姿なんぞ、似合わないわな。

奏「そうじゃないわ」

リオ「そうじゃない？」

何？ オレなんか変な姿してたっけ？

奏「その髪と瞳のことよ」

リオ「……………」

髪と瞳？

リオ「……………あ！？」

やべっ！ カツラすんの忘れてた！？ ってか、あんな格好で出迎えに行ったらごまかしようないからどっちみち涼月さんにバレるか。

奏「気づいてなかったのね」

オレの様子に涼月さんはくすくすと笑った。

リオ「あ、うん。朝からジローたち以外と会うことなんてなかったからさ」

マジで油断してたぜ。

奏「いつもは変装してたの？」

リオ「まあな。こんな色だと何かと目立つしさ。結構、絡まれたりするからメンドーなんだぞ」

奏「絡まれる？」

リオ「そ。ヤンキーたちにいちやもんつけられてボコられるんだよ。オレ一人に対してだいたい四、五人でかかってくるだぜ」

ま、その度に返り討ちにしてるんだけどさ。ちょうど、イライラが最高潮の時に来るから、いいストレス解消になるしな。正当防衛になるからオレに非はない。

リオ「それに、こんな髪色じゃ教師たちに文句言われるの目に見えてるし。生まれつきだって説明してもウソって言われるし。地毛って認められても黒に染めてこいって言われるのがオチだしさ」

奏「たしかにそうね。リオくんはどこかのハーフなの？」

リオ「んや、オレはクォーター。母さんが欧州系のハーフだったんだらしいんだ」

奏「知ってる人はいるの？」

リオ「坂町家と同じクラスの黒瀬ヤマトくらいだな。あ、そうだ。理事長にはこのこと、黙ってもらってていいかな？」

奏「ええ、別にいいわよ。あなたが私の要件を飲んでくれたらね」

リオ「わかってるって。んで、その要件ってのは？」

奏「私にこの家の出入りを自由にさせてほしいの」

リオ「それだけ？」

正直、もっとヤバイのかと思った。

奏「ええ。どうかしら？」

リオ「オレは全然オツケーだよ。」

オレ的にはかなり嬉しいからな。

奏「交渉成立ね」

リオ「あ、カギはいつもポストの中だから。合鍵とか作んなくて大丈夫だぞ」

奏「リオくん」

リオ「ん？」

奏「不用心よ。カギは持ち歩きなさい」

リオ「はい、わかりました。」

涼月さんの目がマジだったのでオレは即答で頷いてしまった。けど、カギ持ち歩くのメンドーなんだよな。

奏「リオくん」

オレの名を呼ぶ涼月さんの声色がワントーン下がった気がする。この人はオレの思考を読んだりするんですか？

リオ「……心配してくれてありがと。それと、さ」

奏「なにかしら？」

リオ「すー……はー……」

オレは深呼吸をしてから勇気を出して、涼月さんに伝えたかった言葉を言う。

リオ「オ、オレの初めての女になってください！」

奏「え、ええっ！？／／／／」

精一杯の勇気を出したオレの言葉に驚いて涼月さんの顔が赤くなった。驚く涼月さんもカワイイ。……じゃなくて、なんで？

奏「リ、リオくん……初めての女ってどういふことかしら？／／／／」

リオ「ふえ？／＼／＼……あ、ち、違う！？　初めての女友達！」

涼月さんに言われ、自分の犯した間違いに気づく。言葉が足りてねえよ、オレ！！　どんだけテンパってんですか！？

奏「……女友達ね。そうよね」

リオ「え、えーと、ダメ、かな？」

奏「もちろんいいわ」

リオ「ホント！　やったー！！」

オレは嬉しさからガッツポーズをしていた。この体質を知られる怖さから女友達なんてなかなか作れなかったもんな。

奏「リオくんったら大袈裟よ」

リオ「すごい嬉しいじゃんか！　だって初めてできた女友達が君みたいなすごい美人なんだぜ♪　これからよろしくな。か……」

奏「か？」

リオ「か、奏／／／」

うう……／／／メチャクチャ顔が熱い……。それに声、裏返ってなかったか？ 女の人を名前で呼ぶのってこんなに恥ずかしいことだったか？ 紅羽を呼ぶときはなんともないのに。

奏「うふふ、よろしくねリオくん」

リオ「あ、ああ／／／」

涼月——じゃなくて、奏はふわりと柔らかい笑顔で微笑んだ。ヤバい、ヤバいね。メチャクチャカワイイんですけど！ この笑顔で心が満たされるや♪ 今ならサタンじゃなくてエンジェルって言える！

ジロー「ぎゃああああああっ！ 目がっ！ 目があっ！」

リオ「……」

ジロー……。オマエ、朝から叫びすぎだからな。目に何があったん

だ？　ってか、オレの幸せな気分をブチ壊すんじゃないねえ！

奏「スバルとなにかあったみたいね。後でスバルに確認を取らなくちゃ」

リオ「なんか楽しそうだな」

奏はさっきの笑顔とは違うイタズラっ子ぽい笑顔を浮かべていた。素材が良いと、どんな表情でも惹き付けられるからズルいよな。

奏「だって、ジローくんなら面白いことしてそうなもの」

リオ「……たしかに。ジローならしてそうだな。つと、もうそろそろ学園に行かないとな」

時計を見るといつも家を出る時間だった。

奏「あら？　ジローくんを助けに行かないの？」

リオ「行かない。行きたくない。今、行ったら絶対ジローと同じ目にあいそうだな。下手したら朝から発作が出て学園に行けなくなるもん」

奏「賢明な判断ね」

リオ「だろ。奏はいつものリムジンで登校なんだよな？」

奏「違うわ。今日は歩いて行こうと思って。リオくん、一緒に行きましょう」

リオ「マジ！？ んじゃ五分！ いや、一分待ってて！ すぐに支度するから！」

オレはカツラとカラコン装着と鞆を取る為に部屋までダッシュした。

奏「……リオくんたら、カッコいい顔して時々カワイイことするんだから。ちょっとドキドキしちゃうじゃない／＼／」

第7話（後書き）

誤字脱字・感想・アドバイスがありましたらお願いします。

第8話（前書き）

ジロー「2日連続投稿」

リオ「今回はジロー視点だ」

第8話

「ジロー side」

黒瀬「よう、ジロー。どうした？ 朝から不景気そうな顔してんな」

教室に入って席につくなり、クラスメートの黒瀬が話しかけてきた。

ジロー「うっせえ黒瀬。景気良い顔ってのどんな顔ってのだよ。額に在庫無しって書いてあんのか？」

黒瀬「いやーん、今日のジローくんったらご機嫌ななめ」

気色悪い声を出してげらげら笑うガタイのいい野郎が一人。黒瀬やマト。俺とリオとは中学一年からずっと同じクラスの腐れ縁だ。

黒瀬「ついでに景気良い顔ならそこにあるぞ」

ジロー「は？」

リオ「」

黒瀬の指差す先には見るからに機嫌のいいリオが小説を読んでいた。たしかに景気良い顔だな。俺と大違いだな。

黒瀬「それでジローはなんか嫌なことでもあったのかよ。また妹にいじめられたのか？」

ジロー「……似たようなもんだ」

こっちは朝から紅羽のプロレスと近衛の目潰しと執事流記憶消去術を喰らったつてのに。紅羽のはいつものだから諦める？　ざけんな！？　あんなのいつも喰らってる俺の身にもなりやがれ！

黒瀬「はぁん。そりゃあご愁傷さま。ところで、ジロー。リオ」

リオ「なんだ？」

黒瀬はリオを呼び寄せ、耳打ちするように顔を近づけて、

黒瀬「ジロー、おまえ、今朝スバル様と一緒に登校してきたってホント？　リオ、おまえも涼月さんと登校してきたって話だけど」

ぶはっと吹き出しそうになった。コイツ、なぜそれを知ってやがる。

リオ「ぶはっ!？」

リオが本当に吹き出したぞ。コイツの所には涼月が行ってたのか。俺、近衛でよかったのかもしれない。朝から涼月なんて身も心も持たないぞ。

黒瀬「うわっ、マジかよ。なんで? どうしておまえらみたいな一般人と学園のアイドル、王子様が一緒に登校してんだ? なんか特殊な関係なの?」

正解。コイツの勘はときどき怖いくらいに当たるからな。

リオ「来る途中で偶然会っただけだよ。別に仕組んだわけじゃない」

黒瀬「だよな。あの優等生たちがおまえらなんかと待ち合わせするわけねえしな」

言って、黒瀬は教室の後ろの方に顔を向けた。つられて見ると、そこにはスバル様こと近衛の姿。大人しく席に座っているが、その仏頂面は普段にまして磨きがかかっているように思える。むー、まだ今朝のことを怒っているらしい。それともあれか。朝食に出したキムチが口に合わなかったのかな。『これが庶民の朝食なのか……』

ってショック受けてたし。

黒瀬「なんか近衛って暗いよな。クラスのヤツにも愛想悪いし。いくら顔と成績が良くても、あれじゃ男子は誰も近づかねえよ。女子は寄って来るけど、そいつらにも冷たいしな」

一目で判るくらいに、近衛はクラスで孤立していた。一緒のクラスの涼月（もちろん優等生モード）が他の女子と仲が良いだけに余計にそう見える。涼月と二人でいるとき以外、あいつはずっと独りで窓の外を眺めている。孤独な王子様。学園での近衛はそんな感じだ。

リオ「そういや、どうしてオレが奏と登校したのを知ってるんだ？」

たしかに気になるな。俺の方も知られてるし。ってか、リオのヤツ、今、『奏』って言わなかったか？

黒瀬「はん。馬鹿言っちゃいけねえぜ。俺らにはケータイっていう史上最強の情報ツールがあるじゃねえか。あの主従コンビがそれぞれ別のヤツと登校してきたなんて特ダネは新型インフルエンザなみの勢いで伝わってんだ。噂じゃ『S4』と『KKK』が動き出してるらしい」

ジロー「『S4?』」

リオ「『KKK?』」

黒瀬「おいおい、知らねえのかよ。『シューティングスターズバル様』。ほら、Sが4つあるだろ。この浪嵐学園で最大勢力を誇る近衛スバルの地下ファンクラブだ。学園の六割が入ってるって話だぜ」

リオ「それで『KKK』は？」

黒潮「わかるだろ？ 『クールで可憐な奏様』。Kが三つ入ってるだろ」

リオ「なんか某ゲームの幼馴染みのファンクラブみたいだなー。ほら、神にも悪ま——」

ジロー「リオ、ストップ。それ以上は駄目だ」

リオがそれを知ってるのに驚きだ。

ジロー「……それで動き出してるってのはどういう意味だ？」

黒潮「はあ？ そんなの決まってるだろ。おまえとスバル様、リオと涼月さんの同伴登校の真相を突き止めるためだよ。気を付けろ。その内おまえらのところにも刺客が飛んでくるぞ」

刺客ってどんなんだろうね。天井から忍者でも降ってくんのかな。

黒潮「それにジローには前々から変な噂があるしな」

リ・ジ「変な噂？」

黒潮「うん。ジローがゲイだって噂」

ジロー「ぶはっ!？」

今度は俺が吹き出していた。なにそのおもしろ情報。びっくりしすぎて心臓がストライキ起こしそうなんですけど。

黒瀬「あ、やっぱ違った？」

ジロー「当たり前だ！」

リオ「バイだもんな」

黒瀬「あ、そっちな」

ジロー「それも違う！　ざけんな！　なんでだ！　どうしてそんな根も歯もない噂があるんだよ！」

黒瀬「えーっ、だってさあ、おまえってクラスの女子と喋らねえし、近付こうともしねえじゃん。思春期真っ盛りの高校生としてそれはねえよ。だから噂ができるのさ。坂町近次郎は女に全く興味がない男色家だってな」

リオ「マジでかよ。ジロー、ドンマイ」

ジロー「……」

頭痛がする。正確には興味が無いんじゃないかと女性恐怖症のせいで近付きたくても近付けないだけなのに。まいったな。そんな噂が流れてたなんて……。

黒瀬「心配すんなよ。半ば冗談みたいなもんだ。そんなもんを真に受けてるヤツは大していいねえ。俺だっておまえが女を好きなのは知ってるよ。リオも入れて三人でエロ本見せ合った仲だからな」

黒瀬はぎゃははと笑った。相変わらずさばさばしたヤツだ。でもそ

う言ってくれる人間がいるとありがたい。学校で生活を送るには一人くらい自分の理解者が必要な気がする。一家に一台って感じで。

黒瀬「でも本当に気を付けろよな。S4の中にはすでにおまえとスバル様の仲を誤解してる狂信的なファンがいるかもしれないねえ。夜道には気を付けろ。それとスバル様にもな。あんまり近付きすぎるといいことねえぜ」

そこまで言って、黒瀬は黒板の方を向いた。静かだと思ったらリオは小説を熟読しているようだった。教室の扉が開いて一限目の教師が入ってくる。今日も何の問題もなく、俺たちの学園生活は始まるっぽい。

第9話（前書き）

アキさん感想ありがとうございます。

リオ「前回に引き続きジロー視点だぞ」

第9話

俺は涼月と会う放課後まで体力を温存していた。そう、決戦は放課後なんだ。……ところが。ところがである。ピンチは以外にもフライングでやってきた。

スバル「一緒にお昼を食べよう」

「「い、一緒にお昼!?!」」

昼休み。近衛のそんな言葉が引き金だった。突如、驚愕という名の銃弾を撃ち込まれて教室がどよめいた。そりゃそうだ。涼月以外、誰もそばに近寄らせなかったあのスバル様が、俺なんかを昼食に誘ったのだ。多摩川でアザラシが発見されたぐらいの珍事だ。

「おいおい……あの近衛が一般生徒を昼メシにさそったぜ」

「あの人、今朝も一緒に登校してきたらしいよ……」

ヒソヒソとクラスメイトたちが囁いているのが聞こえる。いかん。この状況は大変よろしくない。

「まさか……ジローの噂ってマジだったのか……」

「え？　噂って何？　教えて教えて……」

マジじゃないです。決して俺にそういう趣味はありません。あったら今ごろ、リオにボコられて五体満足じゃいられないです。

「あいつ……スバル様に手を出すなんて……許さない」

「殺す……殺す殺す殺す。あのクソ眼鏡、手足を縛ってコンクリ潰けに……」

すいません、視線が痛いっす。あと物騒な殺気を向けるのはやめて。夜中に一人でトイレに行けなくなっちゃうから。

リオ「……女の子ってやっぱ怖いって……ジロー、マジでドンマイ。影ながら応援しているよ」

右隣にいたリオが少し震えながら激励してきた。リオってこういうのダメだからな。

黒瀬「ジ、ジロー、おまえ……」

左隣にいた黒瀬まで、息子がグレてショックを受けた母親のような目をしていた。

ジロー「ち、違う！　これは誤解で――」

スバル「何が誤解だ。ほら、行くぞ」

リオ「……って、オレもなのか！」

スバル「何を当たり前なことを言ってるんだ」

リオ「いや、当たり前じゃないからな！　ちよっ……！？」

必死に弁解しようとした俺を近衛がぐいぐいと引っ張っていく。ついでにリオも引っ張られた。

「え？　リオまで！？　なにかの冗談だろ！」

「嘘よ……リオ様はあのクソ眼鏡とは違うわ！　違うのよ！」

そのことによって、さらに 慌ただしくなる教室内。『リオ様』ですと？ なんだか俺のときと反応が違わないか？ その中で、涼月だけが楽しそうに微笑んでいた。

ジロー「お、おい！ どこに行く気だよ！！」

教室を出て廊下を歩くと、周りの視線が容赦なく突き刺さる。

スバル「とりあえず、人気のない場所だ。こう周りがうるさいんじや落ち着けない」

リオ「オレたちは逢い引き中のカップルかなんかかよ」

スバル「勘違いするな。別におまえたちと一緒にお昼を食べたかったわけじゃない。これは監視の一環だ。ボクの見てないところでおまえたちが何をするかわからないからな」

近衛はこっちを見もせずに行った。なんか俺たちの扱いが発情期の犬みたいだ。そんなに心配ならいっそのこと首輪でもつけてくれ。

リオ「オレたち、信用ないのな」

ジロー「わかった。じゃあ屋上に行こうぜ」

リオ「だな。あそこならたぶん人はいないからな」

観念して従うことにする。どうせならさっさと済ましてしまおう。
それにいちいち反論したらまた殴られそうだ。いくら人より頑丈だからって痛いのは嫌いだからな。

リオ「なら、購買部に寄って行くか」

ジロー「だな。弁当なんて羨ましいもんは持っていないしな」

リオ「スバル様はどうする？ 先に屋上に行ってるか」

スバル「ボクも一緒に行く」

ジロー「弁当ないのか？」

スバル「ボクは料理が致命的にできないんだ。だから、普段は学食で済ませているんだ」

リオ「できない？」

リオの顔がキョトンとした。以外だな。スバル様にも苦手な分野があるんだな。

スバル「うー……」

真剣な表情でコッペパンと睨めっこする近衛。

リオ「購買部にくるのは初めてなんだな」

ジロー「みたいだな」

俺もパンをチェックチェック。えーっと今日のオススメは……キムチサンド？ ふざけんな。韓流ブームもいい加減にしやがれ。

ジロー「無難にヤキソバパンとかチョココロネとかにしとけ。他には惣菜もあるから」

言いつつもコロッケパンとカレーパンを選択。はっきり言って全然足りないが贅沢はできん。今月はひいきにしているバンドのCDが

出るので無駄な出費は禁止なのだ。節約節約。

リオ「オレはカラアゲパンとホットドッグとヤキソバパン。それとやっぱホットケーキだな♪おい、ジロー。今日は奢ってやるからもう少し食っとけ。それだけだと放課後、絶対にもたないぞ」

ジロー「マジでか？ それじゃ遠慮なく♪」

やっぱり持つべきものは幼馴染みで親友だよな。

リオ「あ、スバル様の分も出すから適当に選べよ」

スバル「え？ いいのか？」

リオ「おーいいぞ。初めて一緒に食う記念にな。好きなだけいいぞ」

スバル「それなら、そこにあるヤキソバパンとチョココロネ……それからコロッケパンとカレーパン、あと串カツとメンチカツ……あ、それからいちご牛乳を貰おう」

リオ「……そんなに食えるんだ。その華奢な身体に入るのか疑問なんだけど」

太っ腹なりオの言葉に近衛は容赦無く山のようにパンや惣菜を買い漁っていた。購買のおぼちゃんも目を丸くしている。借金苦でしかたなく生き別れた息子と数十年ぶりに再会したような表情だ。

―ジロ―side out―

第10話（前書き）

リオ「タイトルを『迷えるカノジョとチキンなオレと』から変更したぜ」

ジロー「今回はリオ視点だぜ」

第10話

―リオside―

リオ「やっぱ屋上は気持ちいいな♪」

買い物を終え、屋上へとーちやく。人気のない場所といたらここくらいしか思いつかないんだよ。あとは中庭の隅っこの方だけど、あそこは二階より上の窓から丸見えで下手をすればスバル様のファーンに爆撃されかねないからな。

ジロー「うん、悪くないな。景色は爽快だし、人気もないしな」

オレとジローは間を空けてベンチに座る。さて、メシだな。人間やっぱり食が基本だよ。

スバル「……」

スバル様が、戸惑うように目を泳がせながら立ちすくんでいた。なぜか表情もふらふらと落ち着かない。狙撃でも警戒でもしてんのか？

リオ「何やってんの？ さっさと座れって」

スバル「……」

ジロー「おい、無視すんなよ。おまえが俺たちをメシに誘ったんだろ」

スバル「うつ……。わかったじゃあ、座るぞ？」

おずおずとスバル様はオレとジローの間に腰掛けて無言でパンを食べ始めた。相変わらぬ無愛想。なんかノラネコみたいなヤツだ。すげえ警戒してるや。

ジロー「そういや、涼月はほっといいのか？ おまえ、あいつの執事なんだろ」

無言じゃ気まずいのかジローがテキトーに質問する……けど、返答は沈黙。一向にボールが返ってくる気配がない。

リオ「コラ。ジローがボールを投げてるんだから返してやれって。最低限のキャッチボールはしろよ」

ジロー「そうだ。せっかく一緒にメシ食ってんだからさ」

スバル「うるさい変態」

バッサリと一言で切り捨てられた。会話終了。ひどい。ピッチャー返した。キャッチボールどころか鋭いライナーで打ち返したぞ。

ジロー「なあ……今朝のあれはもう謝ったろ。それに眼鏡がなかったからよく見えなかったしさ」

眼鏡がなくてよく見えない？ ジローのヤツ、スバル様の裸姿と遭遇でもしたのか？ まあいいや。あとで奏に教えてもらえばいいか。

スバル「言い訳するな。それにボクは普段一人で食べてるんだ。昼休みに会話をする習慣はない」

ジロー「おまえなあ……今は三人で食べてんだろ。それともおまえは涼月といるときもこんな感じなのか」

スバル「……」

返答なし。

リオ「凶星なのか」

そう言えば、奏とスバル様が仲良く喋ってるところなんかほとんど見たことないな。よく一緒にいるけど、それこそ主従関係って感じでムダな会話してないな。

スバル「ボクはお嬢様の執事だ。だから、ボクはその仕事さえできればいいんだ」

ジロー「仕事？」

スバル「ああ、お嬢様をお護りすること。それが、ボクの一番の使命だ」

リオ「使命ねえ……」

これじゃ執事っていうよりボディガードだ。そりゃ、ただ警護するだけなら会話はいらねえけどさ。せっかく同い年なんだからもうちよい仲良くすればいいのに。

ジロー「まあ、それでも今は喋ろうぜ。ダベりながら食べた方が楽しいだろ？」

オレもジローに同感だ。会話のない食事とかマジで食欲なくなるから。誰かといるときくらい楽しく食べたいっての。

スバル「……おまえたちはいつも誰かとそうやって食べてるのか？」

ジロー「ああ。よく黒瀬とかと」

リオ「だな。あいつとは中学からずっと一緒だったし」

スバル「中学校か。ボクは行ってないからよくわからないな」

危うくパンに挟んであったカラアゲを落としかけた。

ジロー「……何？ おまえ、中学校通ってなかったの？」

スバル「ああ、ボクもお嬢様も高校からだ。小学校や中学校には通っていない。名前だけ入学して一度も登校しなかった。それが決まりだったから」

決まりっていうのは、言わずもながら奏の実家の決まりか。金持ちの考えることはよくわかんねえや。自分の子供が大事なのはわかるけど、過保護なのも問題ありなんじゃ。けど、そういうのなんか羨

ましくも感じるよな。親の愛情ってさ。

スバル「だから初めて学園に来たときは正直右も左もわからなかったよ。お嬢様は聡明で要領が良いから上手く対応されていたけれど、ボクには無理だった」

はぐはぐとチョココロネをかじるスバル様。無理だった……ね。そりゃムリもないか。いきなり高校からなんてオレでもゾツとする。オレが今この学園で交友関係を築いてそこそこ楽しくやっているのだって、たぶん小中学校と集団でいることに慣れた結果だし。でも、スバル様にはそれがないんだ。免許取りたてのドライバーがいきなり高速道路を走らされたようなもんだ。ビビってブレーキをかけるのも不思議じゃない。そう考えると、可哀想だな。

スバル「だから、おまえたちみたいに友だちとお昼を食べたことはないんだ」

スバル様はらしくない弱々しい声で呟いた。

ジロー「……呼べよ」

スバル「え？」

ジロー「あっ、いや……」

しまった、って顔のジロー。らしくないスバル様につい口を動かしちゃったんだろうな。

ジロー「だから、ちゃんと俺のこと名前で呼べよ。俺だっておまえのことを『近衛』って呼んでるんだからさ。俺の名前は坂町近次郎。長いからジローでいい。クラスのヤツらやリオや涼月だってそう呼んでるだろう？」

リオ「オレもリオでいいぜ。オレはスバルって呼ぶからさ♪」

考えてみればスバル様——じゃなくて、スバルがオレたちを名前で呼んだことって一度もないな。それはちよつと気持ち悪いや。なんか対等じゃないような気がするし。

スバル「でも……いいのか？」

リオ「何が？」

スバル「そんな友だちみたいに呼んで……嫌じゃないのか？」

リオ「イヤなわけないじゃんかよ。そんなだったらハナから言わねえって。な、ジロー」

ジロー「めんどくせえヤツだな。俺は昔からジローってあだ名だったんだよ。それ以外の名で呼ばれる方が気色悪いんだ。だから、呼べよ」

スバル「しかし、一緒にお昼を食べただけなのに……」

リオ「だから、だろ？　一緒にメシを食って、どうでもいいことをダべる。そういうのを友だちっていうんだろ」

オレ、友だちじゃないヤツとメシとか食えねえし。わずかな沈黙。スバルは考え込むように黙ってから、

スバル「……わかった。じゃ、じゃあ呼ぶぞ？　ジ、ジロー……」
／
／

頬を染めながら、どこか恥ずかしそうにジローの名を呼んだ。

ジロー「お、おう。上出来じゃん」

恥ずかしいのを誤魔化そうとしてか、ジローの口調がぶっきらぼうになっていた。

スバル「そ、それじゃ……リ、リオ……／＼／＼」

ジローの名を呼ぶときと同じようにスバルはオレの名を紡ぐ。瞬間、オレは自分の発言を呪った。……コイツ、チョーカワイイんですけど。さすがはスバル様。学園一の美少年の称号は伊達じゃないや。危うく見惚れそうになってしまった。

リオ「や、やればできんじゃないか」

クソッ！ ジローと同じようなリアクションとちったよ。チラッと隣を窺うと、スバルは「ジロー、ジローかあ……リオ、リオかあ……」とオレたちの名を交互に繰り返していた。——と。不意に、スバルの頭が傾いてジローの肩にコツンと当たった。

ジロー「ん？　もしかして眠いのか？」

見るとスバルはあくびを噛み殺しながら目をしょぼしょぼさせていた。

スバル「いや……違う。別に、眠くなんかない」

言いながらも、睡魔に襲われてるのか顔がウトウトし始めている。

ジロー「別に眠ってもいいぞ」

リオ「そうそう。授業の時間になったら起こしてやるよ」

スバル「……そんな気遣いは要らない。見てろ。この程度の眠気なんかすぐにぶっ飛ばして——」

言うが早いかスバルは目をつむってすうすうと寝息を立て始めた。

リオ「逆に眠気にふっ飛ばされてんじゃんか」

ジロー「まあ、こう天気がいいんじゃしかたないだろ」

力を失った身体がジローの方に傾いた。やっぱり綺麗な寝顔だわ。こんなチャンスは滅多にないから写メっとこ♪

ジロー「……って、待て待て」

リオ「あ？」

待てと言われて、ジローを見るとなにやら難しい顔をしていた。ふむ、オレに言ったわけじゃなさそうだな。

第11話（前書き）

リプトン「いつのまにPV10000突破しました」

リオ「みなさんありがとうございます」

第11話

写メだとなあ……。たしかデジカメあったはず。どこやったっけ？俺がデジカメを探していると、突然ガチャリと屋上の扉が開く。現れた人物は、ジローにもたれるスバルを見てわずかに目を細めた。

奏「へえ、珍しいわね」

艶やかな黒髪を揺らしながら颯爽と近付いてくる奏。オレたちの様子を見に来たのかな。でもよくここがわかったな。知らないうちに盗聴器や発信器でもつけられてそうで怖いんですけど。

奏「ふふ、眠っちゃってる。珍しい。スバルが他人のそばで眠るなんて」

リオ「そんなに珍しいのか？」

奏「ハーレーに乗って首都高を逆走するイリオモテヤマネコを見た気分ね」

どんな気分だよ。珍しいってニュアンスは伝わったけど、奏の表情からはそんな感情は読み取れない。相変わらずのクール&ビューティー。同じ年のはずなのにやけに大人っぽく見えるんだよな、奏っ

て。

奏「たぶん緊張の糸が切れたんでしょね」

ジロー「糸？　　そういや今日の近衛は変だったけど、あれって緊張してたのか。でもなんで？」

うえーやっぱりどこからか狙われてんの？　　だとしたら早く死角に逃げないと。

奏「なんでって……そんなのあなたたちと会うからに決まってるでしょう」

リ・ジ「「は？」」

オレとジローの間抜けな声が重なった。なんだそれ。どうしてオレらなんかと会うのに緊張するんだよ。

奏「スバルにとってあなたたちと話すのはすごく神経の張り詰めることなのよ。前の晩から緊張して眠れないくらいにね」

少し大袈裟じゃないか。って、ちょっと待てよ。スバルは高校から

なんだよな。しかも、普段一緒にいる奏相手でもムダな会話をしてない。そりゃそうであってもしかたないか。

ジロー「……。でも、こんなの普通じゃないか」

奏「普通？ それはあなたにとってでしょう。スバルにとっては何から何まで初めての体験よ。私以外の人間と一緒に登校して喋って昼食を食べる。今までそんなことはしてなかったわ。友だちが欲しくても作れなかったせいだね」

ジロー「たしかに、近衛は友だちいないけど……」

違うだろ、バカジロー。

リオ「いないと作れないじゃ意味が違うだろ。よく考えろ、バカ」

ジロー「え？」

奏「リオくんの言う通りよ。スバルには誰にも言えない秘密があるのよ。自分が女の子だっていうね」

ジロー「……あ」

ジローはやっと、言葉の意味を理解したようだ。スバルは自分の秘密を他人に隠さなきゃならない。隠すにはどうすればいい？ そんなのは簡単だ。他人と関わらなければいいんだ。オレが女の子と必要以上に関わらなかったのと同じように、な。

奏「だからスバルは学園じゃ私以外の人間は誰もそばに近寄らせない。秘密を知られるのが怖くてね」

やけにあっさりと言ってるように見えるけど、オレの目には奏がどこか辛そうに見えた。友だちが欲しくても秘密を隠すために作れない。スバルにとって辛いことには変わりない。でも、スバルにそうさせてしまう存在が自分であるとわかってるから奏も辛いはずなんだ。

奏「スバルにとって私は主。この娘の中で私はとても友だちなんて呼べる存在じゃないと思うの。昔は『カナちゃん』なんて呼んでくれて仲が良かったんだけどね。でも——そんなスバルにも、やっと学園で友だちになれる人ができた」

奏は穏やかに微笑んだ。

奏「ジローくん、リオくん。すでに秘密を知っているあなたたちとなら、スバルは友だちになれる。きっとクラスメートと喋るなんて

初めてだったから緊張したでしょうけど」

リオ「なるほど。それでもやっとできたチャンスを失くさないように、スバルなりに頑張ってたんだな」

ゝなでなでゝ

スバル「……ん」

オレが頭を撫でるとスバルは可愛らしい声を漏らす。

奏「私としてもこの結果は嬉しいわ。チャンスをあげた側としてもね」

ジロー「そういや俺に近付くように近衛に命令を出したのはおまえだったな」

奏「もちろん、あなたにも感謝しているわよ」

ジロー「……やめてくれ。恥ずかしいだろ」

奏「ふふ、照れ屋さんね。そんなあなたにはこれをあげる」

ジロー「……？　なんだこれ？」

ジローは渡された小さな紙を凝視する。……なんかのチケット？

奏「名前をつけるなら執事券ってとこね。肩叩き券と同じようなものよ。それを使えば、あなたは一回だけスバルに命令できるの」

ジロー「命令って……」

奏「ジローくんのお望み通り、上半身だけ裸にして胸にハチミツをすりこませながら『ボクを舐めてください』って言わせちゃう。そんな変態行為をさせることも可能よ」

ジロー「そんな愉快的な性癖は持ってねえよ！」

リオ「静かにしろ。スバルが起きるだろうが」

ジロー「うっ……悪い」

奏「まあ、使いたくなかったら使わなくてもいいわ。それは私からのお礼よ」

奏はその場で優雅にお辞儀した。むう、さすがはお嬢様。こういう仕草は様になってるや。

リオ「なあ、奏。オレの分はないの？」

オレはスバルの頭を撫でながら訊く。やっぱコイツの髪って柔らかいな。

奏「……あげようと思ったけどやめておくわ」

リオ「え？　なんでさ」

奏「……気分よ」

奏は一瞬スバルを見て顔を逸らした。何？　オレ、なんか悪いことした？

ジロー「なあ、一つ訊きたいんだけど」

奏「なに？」

ジロー「この執事券に書いてある絵って……何？」

ジローが貰ったチケットを掲げる。そこには奇妙な形をした四本足の生き物が印刷されていた。

奏「ああ、それは私が書いた羊のイラストよ。執事と羊をかけたの。たまには下らないシャレもいいんじゃないかと思って」

リ・ジ「羊って……」

これが？ 奏には悪いけどこんな出来損ないのオニギリにしか見えない形のが？

奏「なかなか上手いでしょ。実は私、子供の頃からずっと画家になりたかったの。まあ、家を継がなくちゃいけないから断念したんだけどね」

ジロー「へえー……そりゃあ残念」

ホント残念だよ。やはり人には得手、不得手があるんだ。

奏「あ、それから気をつけてね。今教室はあなたたちの噂で持ちきりよ」

リ・ジ「「げっ」」

奏「ふふ。じゃあ、また放課後に会いましょう。楽しみにしてるわ」

微笑を残して屋上から去っていく奏。軽く言ってくれたな。オレは巻き込まれただけなのに教室に戻るのが怖くてしかたなくなっちゃねえか。

スバル「えへへ、カナちゃん……もう食べられないよう……」

隣からは変な寝言が聞こえてきた。

ジロー「幸せそうな寝顔だこと」

子供の頃の夢でも見てんのかな。ああ、できればオレも夢の世界に旅立ちたいよ。ジローもなんか考えていたのか深いため息をついていた。

第12話（前書き）

ジロー「今回は俺視点だ」

第12話

—ジロー side—

ジロー「なあ」

黒瀬「どうした？」

結果から言おう。幸運にもトラブルは全くと言っていいほど起こらなかった。教室に入った瞬間、クラスのおとなしそうな女子にナイフで腹を刺され「あはは……ジローくんが悪いんだよ？ わたしのスバル様に手を出すから……」なんて言われるんじゃないかってビビってたんだが、俺たちが戻ってきてても教室内はノーリアクション。気味が悪いくらいに静まりかえっていた。

ジロー「なんでこんな静かなんだ」

黒瀬「これは嵐の前の静けさだ」

リオ「どういうことだ？」

今は放課後。リオは鞆を整理しながら黒瀬に訊ねた。

黒瀬「すでにおまえらとスバル様が仲良く昼メシを食べに行ったりして情報は学園中に伝播してんだ。そんですぐさまスバル様ファンクラブの最大派閥の『S4』の急襲部隊がジローの元に差し向けられることになったらしい」

ジロー「ちょ、ちょっと待て！　なんで俺だけなんだよ！！」

リオ「それで？」

黒瀬「ああ。だけど、寸前でそれを阻止した団体が出てきたんだよ」

おい！　スルーかよ！！　なんでリオにはいかないんだよ。

リオ「団体？」

黒瀬「その名も『スバル様を温かい眼差しで見守る会』。これは『S4』から独立した派閥らしい」

リオ「内部分裂ってやつか」

黒瀬「言っちゃえばそうだな。んで、この団体は、しばらくスバル様の様子を見てから判断しようという理念の下に急転直下に結成さ

れたそうだ」

なんだ、近衛のファンにもマシなヤツはいるんだな。

黒瀬「でも、その連中はあっちの趣味なんだとよ」

リオ「あっち？」

黒瀬「腐女子」

リオ「……………」

あ、リオが黙っちゃまった。

黒瀬「なんでも、ジローとスバル様がBLする同人誌の製作案まで出ているらしいぞ」

お、恐ろしすぎる。どこが温かい眼差しだ。生温かすぎるだろ。

リオ「…………オレはその妄想に汚されてないだろうな？」

黒瀬「残念。リオ×ジローで何十作品か同人誌が出回ってるらしい」

リオ「……」

ジロー「……」

お互いの目が合った。

リオ「Orz……おえ……」

リオがえずく。俺の顔を見てえずくなよ。

「庭渡君、サッカー部のマネージャーが呼んでるよ」

リオ「わかった……ありがとう」

「どういたしまして」

リオはそうとう気持ち悪かったのかふらふらとサッカー部のマネージャーの方へと歩いていった。いや、俺だって気持ち悪いと思ってるけどな。リオと俺でBLするなんて……うえ……考えるのはよそう。

黒瀬「まあ、今の状況はこの二つの派閥による冷静状態だ。近々でかい抗争が起こるだろうけど、それまでおまえの扱いは保留になったっぽい」

安心したけどなんか複雑な感じだ。幸いなことに男子たちは面白おかしくこの争いを傍観してるみたいだ。黒瀬も、俺と近衛がそういう関係だというのはあまり信用してないしな。

黒瀬「それでスバル様とはもうキスはしたのか？」

愉快そうに言いやがった。とりあえず殴ってもいいよな。いや、殴るしかない。

ごすっ！

黒瀬「ぐは……っ！ ……いたた……腹を殴るな」

ジロー「当然の報いだ。と言うか、なんでそんなに情報通なんだよ」

黒瀬「情報はあった方が便利だからな」

黒瀬がどや顔で言った。なんかムカつく。

ジロー「そうだけどな。ところでリオってファンでもいるのか？
昼休みのとき、『リオ様』って単語が訊こえた気がするんだけど」

黒瀬「おまえ、リオの幼馴染みのくせに知らないのかよ」

ジロー「あまり興味なかったしな」

人のモテ具合なんて気にしてられっかよ。

黒瀬「あいつ、顔はまあまあ良いし。運動神経も良いから運動部の
助っ人とかやってたから知名度高いし。それになんだかんだいって
誰にでも優しいからな。ファンがいない方がおかしいだろ」

ジロー「それじゃ『S4』の急襲部隊がリオの方にいかないのもそ
れのおかげだったりするのかな？」

黒瀬「ほら、憧れと恋愛対象は違うって言うだろ？ 『S4』の中
にはファンじゃなくて、リオを本気で狙ってるヤツが何人かいるら
しいぞ」

リオ、おまえ、知らない間にモテてたんだな。でも、女性恐怖症が治らないかぎり彼女はできまい。

黒瀬「んじゃ、俺は部活行ってくるわ」

ジロー「ああ、じゃあな」

黒瀬は気がすんだのか揚々と教室から出て行った。

奏「ねえ、ジローくん」

ジロー「うわっ!？　な、なんだよ!」

背後に回って声をかけるなよ。

奏「あれって、リオくんの癖なの?」

ジロー「あれ?」

涼月の見てるものを追ってみるとリオが近衛の頭を撫でながらサッ

カー部のマネージャーになんか謝ってた。ってか、いつの間に近衛がいるんだよ。

奏「頭を撫でてるのよ」

ジロー「ああ、あれな。たしかにリオの癖だな」

奏「ジローくんもリオくんに撫でられたことあるの？」

ジロー「まあ、幼馴染みだしな」

奏「……そう」

なんだ？　リオと近衛を見る涼月の目が鋭くなったような気がするんだけど。そういや、屋上の時もリオのヤツ、近衛の頭撫でてたよな。あれ？　涼月はまだ撫でられたことないな？　え？　もしかして……。

ジロー「なあ、涼月。リオに執事券を渡さなかったのって……もしかして、嫉妬だったりするのかな？」

奏「……なにを言ってるのかわからないんだけど」

ジロー「ほら、リオが近衛の頭撫でてるのに、おまえは——」

そこまで言っただけ俺は黙った。いや、黙らされた。涼月の指が、俺の首筋に伸ばされていたのだ。

ジロー「あ、あの、涼月様？」

奏「ジローくん。あまりおかしいことを言っていると身を滅ぼすわよ」

三日月のように笑うデビル涼月。や、やばい。目が笑ってねえ！
ってか、凶星なのかよ！？

ジロー「は、はい、肝に命じておきます！」

奏「よろしい。はい、これ」

俺の焦り具合に機嫌が良くなった涼月がメモを渡してきた。

ジロー「なんだ？」

奏「初の治療プログラムを実行する場所が書いてあるの。私は先に向かってるから二人と一緒に向かってね」

ジロー「ああ」

奏「それじゃあ、またあとで」

涼月は颯爽と歩いて教室から出ていった。ついに、涼月奏による俺とリオの女性恐怖症治療プログラムが実行されるのか。気合い入れないとな。

第13話（前書き）

リオ「あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます」

奏「今回はリオくん視点よ」

第13話

ーリオsideー

ジロー「ーで、なんでゲーセンなんだよ、涼月」

ジローは携帯を持ちながら、電話の向こうにいる奏に訊ねた。

奏『あら、ホテルの方が良かった？ 初めてのデートなんだからこれくらいがちょうど良いと思ったのに』

リオ「おまえが言うホテルには三人じゃ入りにくいですからあー!!」

ハンズフリーから流れる出す音声に全力でツツコミを入れてしまった。

奏『冗談よ。前にも言ったでしょ。あなたたちの女性恐怖症は女性に対する恐怖感が刷り込まれた結果。なら、その恐怖症を拭うために普通の女の子に慣れればいいのよ』

だからムリヤリデートするってわけね。今現在オレたち三人がいるのは学園のある街のとなり街にあるゲームセンターの前。まあ、さすがに学園の近くのゲーセンに行く度胸なんてねえしな。こんなところを学園の誰かにでも見られたらdead endしても不思議

じゃないからな。あのスバル様とデートねえ。まったく、スバルもよくここまでするよな。いくら奏の命令とは言え、オレたちなんかとデートするなんてさ。

ジロー「そういや、おまえは今どこにいるんだよ?」

電話の向こうの奏に訊いた。

奏『私はその近くにある漫画喫茶で『ジョ×ヨの奇妙な冒険』を読んでるわ。あなたたちの邪魔しちゃマズいからね』

リオ「オレもそっち行きたいんだけどダメなのか?」

奏『ダメよ』

リオ「むー……一人だと淋しいじゃん? それなら奏もこっちに来てくれよ。オレの相手役でデートして。オレ、奏とデートしたいもん」

奏『……………』

リオ「奏?」

なぜか奏からの返答がない。どうしたんだ？

奏『さあ、そろそろ始めましょうか。手始めにスバル。ジローくんの身体に触ってみて』

あれ？ オレの言葉はスルーですか？

スバル「わかりました、お嬢様」

慎重な手つきでスバルがジローの腕に指を伸ばした。なんか時限爆弾でも解体する感じだ。ちょこんと、スバルの小さな指がジローの指先に触れる。

奏『さあ、どう？』

ジロー「どうって何が？」

奏『ムラムラしてこない？』

ジロー「するわけねえだろ！ どんだけ飢えてんだよ俺は！」

奏『おかしいわね……ちゃんと購買のパンには混入しておいたはずなのに』

リオ「混入って何を!？」

聞き捨てならない言葉にオレは声をあげていた。そりゃそうだろう。オレだって購買のパンを食べてるんだから。

奏『バフ×リン』

リ・ジ「『バフ×リン!？』」

オレとジローの声がハモる。なぜにバフ×リン？

ジロー「なんでそんな常備薬を!」

奏『だってあなたたちも心を病んだ現代人の一人でしょう？　だから今こそバフ×リンの優しさが必要なんじゃない』

リオ「急に真面目そうなこと言い始めたよこの人!」

奏『私の知り合いにはバフ×リンを飲んで身長が5センチも伸びた人や、引きこもりから見事に社会復帰した人もいるわ』

リオ「それ絶対バフ×リン関係ないよね！」

奏『――優しさは、世界を救う』

ジロー「かつこいい言葉で無理矢理締めようとすんなよ！」

ビキビキとケータイの画面が音を立てる。

リオ「おい、ジロー！ ケータイが壊れんぞ」

ジロー「危ねえ、もうちょつとで握り潰すところだった」

ジローは我に返ったのかケータイを握る手から力を抜いた。

奏『まあ、ジャブはこれくらいにして』

ジャブでこれですかい。だったらストレートはどんな威力を放つんだよ。会話が成り立つのか心配だ。

奏『どうかしら、ジローくん。鼻血は出てない？』

ジロー「……？ 出てないぞ」

奏『それはおかしいわね。あなたは今、女の子に触られたのよ』

ジロー「あっ……」

そういやそうだな。スバルに――女の子に触られたっていうのにジローの身体は全く反応してなかった。

奏『やっぱりね。たぶんあなたはまだ心のどこかでスバルを女の子だって認識してないのよ。だからちよっと触れられたくらいじゃ恐怖症が発症しない。今回はそれを利用するの』

奏は一度息を吐く。

奏『それではミッションスタート。とりあえず脱ぎなさい、スバル』

スバル「わかりました、お嬢様」

リ・ジ「「ちょっと待てえええええっ！」」

身を乗り出しながらオレたちは全力でツツコミを入れていた。

奏『どうかしたのジローくん。リオくん。これはあなたの為なのよ？』

ジロー「うるせえ！ 初っ端から飛ばしすぎだろ！」

リオ「おまえは自分の執事に何をさせる気だ！ オレに恐怖症を発症させる気か！！」

奏『何を言ってるのかしら。私がいつここで脱げなんて言ったのよ』

リ・ジ「「え？」」

スバルを見るとスポーツバックを持って、ぱたぱたとゲーセンの中に消えて行った。

奏『それより、リオくん。どうしてスバルが脱ぐだけで恐怖症を発症するの？ 女の子に触られてるわけでもないのに』

リオ「は？ ジローがオレの恐怖症になった原因を説明したんじゃないのか？」

オレは首を傾げてジローを見ると、ジローは肩をすくめていた。

奏『ジローくんと一緒にじゃないの？』

ジロー「……悪い涼月。俺から説明できることじゃなかったからな」

リオ「……そっか。それなら今度、奏とスバルに説明しないとな」

奏『そう。お願いね』

リオ「ああ。それでスバルは何しに行ったんだ？」

オレはこの空気を変えるように話題を戻した。

奏『トイレで脱いでるのよ』

ジロー「はい？　どういう意味だ？」

奏『ふふ、計画は完璧よ。あなたたちはスバルを女の子だと完全に認識していない。それが好都合なの。いきなり普通の女の子とデートなんかしたら刺激が強すぎるから』

ジロー「それはわかったよ。つまりは少しずつ慣らそうってことだろ」

リオ「ようは自転車の補助輪みたいなもんか」

まずはオレたちがまだ完全に女だと認識できてないスバルから始めて、徐々に普通の女に接するのに鳴らしていこうっていうプランってとこか。

リオ「でも、どうしてスバルを脱がすんだ」

奏『すぐわかるわ。それより――』

ジロー「それより？」

奏『ビックリして倒れないでね』

リ・ジ「「は？」」

意味がわからなかった。しかし待つこと数分、オレたちはその言葉の意味を瞬時に理解することになるのだった。

第14話（前書き）

リオ「今回は原作より早くアイツが登場するぜ」

＊修正しました＊

第14話

スバル「ジ、ジロー……リオ……」

浪風学園の女子の制服に身を包んだスバルがゲーセンから出てきたのだ。

リ・ジ「――っ！」

や、ヤバい。確かにこれは卒倒ものの衝撃だ。メ、メチャクチャカワイイじゃねえかよぉ!! 制服のスカートから覗くほっそりとした足。ニーソックスを穿くことでその脚線美がより際立っている。髪をほどいてリボンまでしてるせいか、かなり女の子っぽい。つか、似合いすぎですからぁ! マジでこの制服を着るために生まれてきたっていつでも過言じゃねえぞ。

奏『どうやらスバルが戻ってきたみたいね。大丈夫? まだ意識は保ってる?』

リオ「あ、ああ……」

ジロー「なんとかな……」

そうか。あのスポーツバックはこの為だったわけな。わざわざ着替えを持ってきていたとは恐れいったよ。

ジロー「なんか……胸まで大きくなってる気がするんですけど……」

ジローはスバルに聞こえないようにコソコソ言った。つか、そこは触れてやるなよな。

奏『コルセットよ。スバルは普段コルセットで胸を締め付けてるの。あんまり意味ないけどね。それに、今はパット入りのブラをしているはずよ』

意味ないって……ヒデエ……スバルがサイズを気にしてたらどうするんだよ。

ジロー「へえ、そうなんだ……」

頷いた後、ジローは何か気になることがあるのか首を傾げていた。

奏『ちなみに昨日、スバルはコルセットをするのを忘れていたそうよ。だから、ジローくんが昨日理科室で触ったのは――』

リオ「待て。もういい奏。それ以上はやめよう。このままだとジロ―が人の道を踏み外しちまう」

ジロ―がヤバめな百面相してる。

奏『それも面白そうじゃない？』

リオ「否定はしないけどな」

奏『ふふっ。さあ、それじゃミッションを続けて。あなたたちはその姿のスバルと今からゲームセンターでデートするの。何か起きたら連絡をちょうだいね』

ジロ―「ちょ、ちよつと待て！」

リオ「電話を切る気か！」

今のスバルと一緒にされるのはヤバイ。着替えたスバルはどこからどう見てもカワイイ女にしか見えないんだぞ。ってか実際女だけだな。これじゃ慣れるどころかゲームセンターが（ジロ―の）血に染まる……！

奏『頑張ってね。私は今、手が離せないの』

リオ「なんだよ。漫喫でなんかあったのか？」

奏『ええ。とても深刻な事態よ。今、ジョ×ノの体に入ったナラ×チャが大変なことに……』

ジロー「とりあえずジョ×ヨを読むのをやめろ！」

ジローの叫びも虚しく、ブツッと電話が切れた。さすが、サタン涼月。オレたちより漫画を優先しましたよ。

スバル「なあ……ジロー、リオ。これ……変じゃないかな？」

やけに短いスカートを指でつまみながら、スバルが訊いてきた。

ジロー「あ、ああ。すげえ似合ってる」

リオ「メツチャカワイイ」

その証拠に周囲の目が集まり始めてる。ホント知り合いがいなくてよかったよ。

「「ヒッ……!?!?」「」」

とりあえずうつとしいから睨みを利かして牽制し、周囲の目を霧散させた。

スバル「そ、そうかな？ 実はこの制服……一度は着てみたいって思ってたんだ」

ひらひらとスカートを揺らしながら、スバルは嬉しそうにくるくる回った。チクショ、メチャカワイイんですけど。もしかしたらずっと女の子の格好がしてみたかったのかな。男として暮らしてちゃん機会ないもんな。

スバル「さあ、行こう。ジローとリオの恐怖症を治すんだ」

やけに張り切りながらゲーセンの入り口へと駆けて行くスバル。オレたちもそれを追ってゲーセンへと入る。……今更だけど、これって荒治療だよな？

スバル「ジロー、これはなんだ？」

入って早々、スバルの視線はクレインゲームに釘付けになった。もしかしなくてもゲーセンすら初なんじゃね？

ジロー「それはUFOキャッチャーって言って、お金を入れて中身を手取るゲームだ」

スバル「ほう」

ジローが説明したがどう見ても聞いてねえな。スバルはドレスに憧れる少女のようにガラスケースにべたっとへばりついていて。そんなに気になるのかと思って覗くと『沈黙ヒツジ』なるヌイグルミがガラスケースの中で群れをなしていた。

リ・ジ「……」

おい、これって大丈夫なのか。デザインはかわいくデフォルメされた羊のヌイグルミなんだが、なぜか歯がギザギザしていて妙に鋭い。口元が赤いやツもちらほら混じっている。隣も見みると『沈黙ヒツジと愉快的仲間』と書いてあった。『爆笑オオカミ』はデフォルメされた狼のヌイグルミ。厭らしい目で笑っている。『羞恥ウサギ』はデフォルメされた兎のヌイグルミ。顔、というか全身が真っ赤になって目を閉じている。

スバル「……かわいいな……」

むー、この様子だとかかなり気に入ったらしい。意外に少女趣味なのかもしれない。センスは疑うけどな。あまりに欲しそうにしているの
でジローが「取ってやろうか？」と訊くとスバルはこくこくと頷いた。

リオ「そんじゃ、ジロー」

ジロー「勝負だ、リオ」

オレたちは『沈黙ヒツジ』を先に取れるか勝負する。やるのが久しぶりすぎて目当ての『沈黙ヒツジ』が取れねえ。なんで『爆笑オオカミ』と『羞恥ウサギ』は取れるのにい！

ジロー「よっし！ 俺の勝ちだ」

リオ「だあゝ！？ 負けた……」

ジロー「ジュース頼むな」

リオ「はいはい」

オレはジローとついでにスバルの分のジュースを買いに二人から離れた。

リオ「ってか、このヌイグルミどうしょ?」

『爆笑オオカミ』は奏にあげるとして、『羞恥ウサギ』は――

どんっ! っ

リオ「てっ!」

???「きゃっ!」

ヌイグルミに目が行ってたせいか人とぶつかってしまった。

リオ「す、すみません」

???「こ、こちらこそ、すみません」

お互い頭を下げて謝る。相手の女の子の制服は今、スバルが着てい

るものと同じ。ようは浪嵐学園の生徒だ。これはヤバイよな。

リオ「あ……」

生徒手帳が……。『宇佐美マサムネ』か。宇佐美って、ウサギみてえだな。あ、ついでにコイツも受け取ってもらおっと。

リオ「はい、これ。生徒手帳。それと、あの、これぶつかったお詫びで。どうぞ」

マサムネ「え？」

なんか警戒心剥き出しじゃね？

リオ「いない？」

マサムネ「……／／／」

警戒を解いてもらえるように精一杯微笑みかけると、宇佐美さんはヌイグルミと同じように顔を赤くしてオレから生徒手帳と『羞恥ウサギ』を受け取った。

ジロー「ぎゃはっ!？」

奇声が聞こえた方を見るとジローがぶっ飛んでいた。

リオ「何やってんだ……」

マサムネ「あ……」

オレはなにか言いかけた宇佐美さんを放ってジローの方へと駆けてしまった。

マサムネ「お礼……言いそびれちゃった……／＼／」

第14話（後書き）

リプトン「切り位置がわかんないよー（泣）
……睡眠時間をください！」
僕に執筆する時間を

ジロー「リプトンがなんか言ってるぞ」

リオ「相手にするな。疲れるから」

第15話（前書き）

紅羽「あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます！」

第15話

リオ「ジロー、大丈夫か!？」

受身を取るためゲーセンの床を転がるジローに駆け寄る。ジローが転がってきた方を見ると――ショートカットの似合う女の子が立っていた。

リオ「って、紅羽あ!？」

そう、坂町^{サカマチ} 紅羽^{クレハ}。ジローの妹君の登場だった。

ジロー「く、紅羽! おまえ、こんなところで何してやがる!」

ジローがずれた眼鏡を直しながら叫ぶ。

紅羽「何してやがるはこっちのセリフだよ、兄さん……!」

紅羽の声は怒りに震えていた。ジロー、オマエ何したんだよ?

紅羽「学園で変な噂を……兄さんが男の独りで人と付き合ってるなんて噂を聞いてさ。そんなわけないって思ってたけど、心配だった

から学園からずつとついてきたんだよ」

リオ「ついてきたって……」

ジロー「尾行してきたのか!？」

ストーカーかよ、オマエは。実の兄貴をストーキングとかマジ笑えねえぞ。

紅羽「うん。そしたら……リオ兄まで巻き込んで、まさかこんなことになってるなんてね。さあ、何か言ったらどうなんですか？ 近衛先輩」

紅羽の言葉にびくつとスバルの身体が震えた。ヤバッ！ 今のスバルはどっからどう見ても女の子だ。これじゃ誰が見ても気付いちまう。あのスバル様が、実は女の子だっていう事実……！

紅羽「あなたにこんな秘密があったなんて……びっくりですよ」

紅羽は、トリックを見破った名探偵のようにスバルを指差した。そして、ビシッと断言する。

紅羽「まさか、あなたが女装趣味のあるヘンタイさんだったなんて

！」

リ・ジ・ス「「は？」」

オレとジローとスバル、三人分の気の抜けた声が聞こえた。……よかった。紅羽がバカで本当によかった。どうやら最悪の事態だけは免れたみてえだな。

紅羽「あなたが今朝、家に来たときからおかしいとは思っていたんです！ このドロボウ猫っ！ あなたがうちの兄さんをたぶらかしたんですねっ！」

ドロボウ猫で……。本当に言うヤツ初めて見たわ。兄妹揃って、オレの想像を越えるんだからすげえや。

ジロー「ちょ、何を言ってんだ、このバカ！ そんなことがあるわけ——」

紅羽「兄さんは黙ってて！」

フーフーと手負いの獣のように息を乱しながら、紅羽はジローの言葉を遮った。

紅羽「全部……全部、あたしは見てたんだよ？　兄さんが女装した近衛先輩にヌイグルミをプレゼントしたり、二人で抱き合うみたい
に身体を寄せ合ったり……そして、極めつけは……！」

紅羽は目到大粒の涙を溜めて、

紅羽「キス……男の人同士でキスしようとしてたでしょっ！」

リオ「……え？　マジで。やるなあ、ジロー。オレがいない隙にそこまで進んじやったのかよ」

ジロー「違うわ！？」

リオ「ジョーダンだって」

違うってわかってるけどジローをイジるのは楽しいからな。けど、紅羽はマジだな。そういや紅羽は昔から思い込みが激しかったな。経験上、こうなったコイツはもはや誰の言うことも聞かずに――暴走する。

紅羽「近衛先輩……いくら可愛いからって……学園一の美少年だからって……うちの兄さんを誘惑するなんて……っ！」

それは、タイマーが作動した時限爆弾を見ている気分だった。

紅羽「あたしの……あたしの兄さんを返せえーっ！」

爆発する紅羽。咆哮と同時に、その小さな身体がスバルめがけて弾丸のごとく走り出す！

ジロー「くっ、近衛！ 気を付けろ！ そいつは——」

ジローが忠告を発しようとした瞬間、すでにスバルは動き出していた。おそらくは身を守るための反射的な動作。一直線に突っ込んでくる紅羽に、スバルは牽制の左拳を出そうとして——。

紅羽「甘い！」

繰り出されたスバルの拳を、紅羽はひょいと軽やかな動きでかわす。そしてそのままスバルの手首を掴み、その身体に飛び移るように足を絡めた。

ジロー「あれは……跳びつき腕十字固め」

たしかそんな名前の技だったな。散々、練習台にされてきたジローが言うんだから間違いないな。オレはあの技はまだ喰らってないな。――サブリミション関節技。紅羽は、鮮やかにスバルの関節をキメようとしていた。バランスを崩したスバルの身体が打つ伏せに倒れる。こうなっただけで、後は簡単だ。紅羽が掴んだ腕を伸ばすだけで、スバルの肘は完璧に破壊されてしまう……！

紅羽「どうだ！　これが浪嵐学園手芸部の実力よっ！」

勝利を確信したのか、紅羽は叫んだ。いや、普通の手芸部員はこんな見事に関節技をキメたりできませんからあ！　と、ツツコミを入れたかったんだけど、今はそれどころじゃない。さすが紅羽。伊達に十年以上オレたちをシバいていないぜ。このままだと、リアルにスバルの腕が折れ――

リオ「！」

紅羽の技がキマったと思った――その瞬間だった。ぎゅるっとスバルの身体が回る。驚くことにスバルは自らの身体を前転させ、その回転力を利用して強引に紅羽の拘束を解いていた。

紅羽「えっ――」

紅羽の顔が驚愕に染まる。完璧にキマろうとしていた腕十字から抜

け出されたのに焦ったのか、一瞬だけ体勢を立て直すのが遅れてしまふ。その一瞬を――スバルは見逃さなかった。

リオ「紅羽！」

ミドルキック。中腰で立ち上がりとしていた紅羽の顔面に、強烈な中段蹴りを放っていた。

紅羽「きゃっ!？」

紅羽はどうか顔の前で両腕クロスしてなんとか防御した。

リオ「っ!？」

オレは咄嗟に紅羽の背後に回り、紅羽を受け止める。危ねえ……。なんつー威力の蹴りを放つんだよ。受け止めたオレまで軽く後ろに飛んだぞ？

リオ「お、おい、紅羽？」

ジロー「大丈夫か？」

ジローが心配そうに駆け寄ってくる。紅羽はショックを受けた表情だった。顔が無事なところを見ると、蹴りの威力で動けないのではなく、いとも簡単に関節技を抜け出され、そのまま圧倒されてしまったことが衝撃だったみてえだな。

紅羽「な、なに、これ……」

ぶつぶつとうわごとのように呟いた後、

紅羽「こんなの……こんなの反則だよっ！」

うわあああつと叫び声を上げながら、紅羽はゲーセンから走り去っていた。オレたち三人はそれをただ呆然と見送るしかなかった。

第15話（後書き）

紅羽「うさみん先輩に続いてあたしの出番だよー♪」

ジロー「出てきて早々、近衛にあっさり返り討ちにあってんじゃん」

紅羽「兄さんうるさいよ!」

ジロー「ぎゃああああ!?! キマってる! 肘があ!?!」

リオ「兄妹のスキンシップなら他でやれよな」

ジロー「リオ、助けろよ」

リオ「オレはなにも見えない、聞こえない♪」

ジロー「薄情者おー!」

第16話（前書き）

リプトン「イエーイ！ 投稿1ヶ月！！」

リオ「なんだかんだ、あつという間だな」

ジロー「いつまで一日置きの更新が続くか疑問だな」

リプトン「ジロー、それは言わない約束だよ」

第16話

スバル「すまない、ジロー」

男の姿に戻ったスバルはシュンとウナ垂れていた。クソッ！ サー
ビスタイムはもう終わりなのか！！ もう少しオレに癒しを与えて
くれてもいいんじゃないんですかね、ホント。

奏「リオくん、真剣な顔でなにを考えてるの？」

リオ「だって、まだスバルの女子制服ver. をフレームにおさ—
—」

奏「リ・オ・く・ん？」

リオ「ナニモカンガエテイマセンヨ、カナデサマ。カンガエルワケ
ナイジャデスカ、アツハツハツ」

奏「それなら良かったわ」

本音をポロっと出してしまった。笑ってるようであなたのキレイ
瞳が笑ってないですよ、奏さん。

スバル「本当にすまない。妹さんをあんなに強く蹴るつもりはなかったんだ……」

紅羽が去ったあとオレたちもゲーセンを出た。というか逃げた。さすがにあれだけの騒ぎを起こしたら居づらいつての。それで今は帰宅中。奏とスバルの帰宅ルートが偶然にもオレたちの家を通るので、一緒に帰ることになったんだ。前がジローとスバル。それで後ろがオレと奏。女の子と並んで帰れるなんてサイコーですよね♪

リオ「おいおい、そんな落ち込むなって」

ジロー「そうだぞ。ああでもしなきゃ紅羽は止まらなかったし」

リオ「スバルが護身術を身に付けてなかったら今ごろヤバかったぜ？」

ジロー「だな。じゃなきゃ全身バキバキにされてもおかしくないからな」

紅羽ならそれくらいうつかりやりそうだもん。

奏「まあ、スバルの蹴りがきつかけであなたの妹さんがイケナイ趣味に目覚めないことを祈るわ」

ジロー「黙れ涼月！」

平然としてるな、奏。誰のせいだと思ってんのさ。きっと今ごろ荒れてるんだろうなあ、紅羽のヤツ。シバかれるであろう、ジローに同情だわ、マジで。

ジロー「はあ、また熊五郎を修理しなくちゃなんないのか」

スバル「……熊五郎？ 誰だそれは？」

スバルが怪訝そうな顔をした。

リオ「紅羽がガキン頃から持つてるでっかいクマのヌイグルミだ」

ジロー「よくボロボロになるからその度に俺が修理してるんだ」

リオ「そのおかげでジローの裁縫スキルはかなりのもんなんだよ」

スバル「なんだ。あの娘も可愛らしいところがあるじゃないか。やっぱり女の子だな」

リ・ジ「……………」

……い、言えねえ。実は熊五郎はオレとジローがいないときの身代わりとして紅羽のサンドバッグになってるヌイグルミなんだ……なんて、口が裂けても言えないツス。容赦なく紅羽にシバかれてロボロになり、何回も燃えるゴミと一緒に捨てられそうになった熊五郎を、ジローが何度も何度も修理しているんだ。もはや感覚的にはヌイグルミというより戦友に近いだろう。ジローと熊五郎は、二人三脚で坂町家の修羅場を潜り抜けてきたのだ。

ジロー「じゃあな。また明日、学園で」

ジローの家の前まできたので二人と別れた。

奏「ええ、またね。リオくん、ジローくん」

……なんだろ。奏の笑みが怖く見えたんだけど。気のせいだよな？

リオ「気をつけて帰れよ。さ、オレたちも帰ろうか」

ジローの家は普通の一軒家……じゃないんだよな。端から見ればただの一戸建て住宅なんだけど、建物の下には道場兼ウェイトルームになっている地下室があるんだ。ジローと紅羽、ついでにオレもなんだけど、ガキの頃からそこで朱美^{あけみ}さんによる格闘技教育を受けてきたんだ。ジローはいつもやられっぱなしだったけどな。オレ？オレは必死で対抗してたさ！ 何回か死にかけたけどな。車庫には真っ赤で高級そうなスポーツカーが停まっているけど、これも朱美さんの趣味。昔はよくこれで峠をかつ飛ばしていたらしい。どこの走り屋ですかって話だよな。

リオ「そんじゃ、オレも帰るよ」

オレは坂町家から逃げるように我が家へと――

がしっ！、

ジローに肩を掴まれた。

リオ「おい、そのメツチャ震えてる手を放せよ。オレは自分の家に帰りたいんだって」

ジロー「頼む！ 一人じゃ怖いんだ！ リオがいたら、いろいろと助かるんだ！！ 主に俺の身が……」

リオ「……ったく……しかたないな」

オレは頭をガシガシとかいて、坂町家に身体を向ける。

ジロー「助かる」

ジローが玄関のカギを開ける。さあ、ここからが正念場だ。紅羽に今日あったことを上手く説明しなきゃな。きっと骨の折れる作業になるんだろうぜ。

ジロー「……マジで折られなきゃいいけど」

リオ「シャレにならないことを言ってんなよ」

扉を開けると、家の中は真っ暗だった。……おかしいな。もうとつくに紅羽が帰ってるはずなんだけどな。そう思いながら、廊下の電気を点けると――

リ・ジ「「ひいっ!」」

クマのヌイグルミが惨殺されていた。

—リオside out—

第17話（前書き）

リオ「今回は少し短いぜ」

ジロー「ついでに俺視点だ。よろしく」

第17話

—ジローside—
リ・ジ「ひいっ！」

俺たちは思わず悲鳴を悲鳴を上げた。ズタズタに引き裂かれたヌイグルミの惨殺死体。その胴体が廊下の壁に包丁で打たれていた。熊五郎だ。やばい。今、現在の紅羽は日本株式市場なみに荒れているらしい。この凄惨な現場がそれを物語っている。一体どんな技をかければこうなるんだ。修復不可能に近いくらいバラバラになった熊五郎の身体。ふと——その無機質なプラスチックの瞳と目が合った。

熊五郎『——生きろ』

……！ 信じられない。幻聴だ。決して声を出さぬはずのヌイグルミが、俺に向かって言葉を発した気がした。

ジロー「く、熊五郎お——っ！」

くっ！ 直せるかどうかはわからないけど精一杯頑張るからな、熊五郎！ 俺は心の中でそう誓うと、止めどなく流れる熱い涙を拭いた。

リオ「これは……相当ヤバいな」

リオの顔は冷や汗をかいていた。リオのカンが嫌な予感を訴えてる。

紅羽「……兄さん、リオ兄」

リ・ジ「く、紅羽!？」

聞き慣れた声に改めて前を向くと、そこには紅羽が立っていた。まだ制服のままである。

紅羽「おかえり／＼／＼」

リオ「あ、ああ」

ジロー「ただいま……」

あれ？ 思ったより落ち着いてるぞ。それどころか元気がない。やっぱ近衛に負けたのがショックで落ち込んでるのかな。

紅羽「兄さん、リオ兄……一つ訊いていい?／＼／＼」

リオ「ど、どうぞ」

ジロー「な、なんだよ？」

妹のやけにマジな口調に緊張してしまう。もしかして遺言とか訊かれるんじゃないかな。次に喋ったことが俺たちの最期の言葉になったりして。あはは、笑えねーぞ。

紅羽「兄さんって……近衛先輩と付き合ってるの？／／／」

ジロー「ち、違う。あいつはただの友だちだ」

紅羽「それじゃあ、リオ兄は？／／／」

リオ「違うに決まってるだろ。そもそも男同士で付き合ってるわけないだろ」

紅羽「……そっか。そうだよな。今日のは全部あたしの勘違いなんだよね。ああ、よかったあ／／／」

ホッと胸を撫で下ろす紅羽。はて？　心なしか顔が赤くなっているような。風邪でも引いたんだろうか。

紅羽「あのね……兄さん、リオ兄。ちょっと相談があるんだけど……／＼／＼」

ジロー「相談？」

リオ「どうした？」

紅羽「うん。あたし……好きな人ができちゃったの／＼／＼」

リ・ジ「……は？」

紅羽「こんな気持ちになったの初めてで……その、どうしたらいいかわからなくて……／＼／＼」

リ・ジ「……」

紅羽「実は……その人、兄さんたちの友だちなんだ／＼／＼」

紅羽は恥ずかしそうに頬を赤く染めた。警戒警報発令。嫌な予感がある。まるで津波がやってくる寸前の砂浜でビーチバレーにでも興じてる気分だ。リオを見ると冷や汗がハンパない。これは、とんでもないビックウェーブがくるぞ……！

紅羽「それで相談なんだけどね……兄さん、リオ兄／＼／」

紅羽はモジモジしながら指をくつつけたり離したりしている。

紅羽「近衛先輩って、付き合ってる人とかいるのかな？／＼／」

リオ「さ、さあ」

ジロー「いないんじゃないか」

紅羽「そっか……そうなんだ／＼／」

えへへと紅羽は笑った。

紅羽「実はね、兄さん／＼／」

ジロー「な、なんだ？ 我が妹よ」

紅羽「さっきのキックで、ずきゅんってきちゃったの／＼／」

ジロー「へ、へえー……」

紅羽「近衛先輩って、強くてかっこいいよね／＼／」

リオ「ま、まあ、そうだな。アイツはすごくカッコイイけど……」

紅羽「あたし……大好きになっちゃった／＼／」

ジロー「……」

妹が告げた言葉に俺はショックで声が出なかった。なんだって？

紅羽が誰を大好きになっちゃったって？

リオ「……しょ、正気か紅羽ぁーっ！？」 あのスバルなんだぞ
「!?」

紅羽「うん、近衛先輩……／＼／」

大変だ、天国の親父。あんたの娘が、女の子に恋しちゃったぞ。

—ジロ—side out—

第18話（前書き）

リプトン「ようやく、リオの女性恐怖症になった原因が明かされます」

リオ「やっとかよ。こんなに引っ張って置いて、拍子抜けとかやめろよ?」

リプトン「……僕もみなさんの反応が怖いんだよね……」

リオ「オレにとってはサイアクな過去だからな」

リプトン「そうだね」

リオ「とりあえず、今回はオレ視点と初の第三者視点があるぜ」

第18話

―リオside―

リオ「ただいまー……つと」

オレは紅羽の爆弾発言を受けてどっと疲れて帰ってきた。なんだかシバかれた方がいろいろとよかったのかもしれない。主に精神面で……。オレは誰もいない家にいつものようにそう言った。誰もいないから返事がないのは当たり前。いつもこの瞬間が淋しくて堪らない。

リオ「……腹もそんな空いてないし、作るのもメンドーだから風呂入るか」

オレは無気力な身体を引きずって疲れをとるために浴場へと向かった。

♂×♀

リオ「んくんく……ぷはあっ！
風呂上がりはやっぱコーヒ―牛乳
だよな♪」

風呂上がりだから頭にタオルを被った状態でコーヒー牛乳を飲む。
至福の一時だよな♪

「その格好のままだと風邪引くわよ、リオくん」

リオ「だいじょぶだよ。いつものことだしさ」

「お嬢様が心配なさってくださいるんだ。早く服を着ろ、リオ」

リオ「んなこと言われてもオレのじゅーってなんでオマエらがオレの家にいるのさ!？」

なんとなく違和感がなく会話してたけど、この家にはオレしかいない。なのに声をかけられたことに驚き振り抜くと奏とスバルがいた。

奏「あなたに会いたくて……／＼／」

奏は顔を赤く染め、俯き加減でそう言った。チクシヨ、なんだこの可愛さは！

リオ「奏にそんなこと言われたら嬉しいのに変わらないけどさ！絶対に違いますよね！！」

奏「あら、バレちゃった」

奏はアツサリと顔をあげ、テヘツと舌を出していた。なにをしてもカワイイんですけど、この生き物。

リオ「そんで、こんな時間に何の用なんだ？　あまり遅い時間に出歩くのは感心しないよ」

スバル「感心しないのはこっちの台詞だ。玄関のカギはちゃんと閉めておけ。不用心だぞ」

あ、ヤバッ……疲れてカギ閉め忘れたんだ。

リオ「忠告サンキュ。んで？」

奏「……あなたの女性恐怖症になった原因を教えてくださいましたの」

リオ「それはまた、せっかちなことで」

スバル「リオ」

オレがはぐらかすように、おどけるように言うと、スバルが怒ったようにオレの名を呼んだ。

リオ「そんな怖い声出すなって。ちゃんと話すから。……あー、あいにく紅茶が切れててさ、コーヒーしかないけどいいか？」

戸棚を探るとコーヒーしか見当たらない。

奏「ええ」

スバル「ボクがやるからリオは早く服を着てくるんだ」

リオ「サンキューな」

オレはスバルの言葉に甘えて、自室に上着と、あるものを取りに行った。

—リオsideout—

— non side —

リオ「お待たせ」

理桜は片手に持っていたピンをテーブルに置く。

奏「リオくん、それ……」

リオ「気にしないでくれ。情けない話、コイツの力を借りないと上手く口が動かないんだ」

理桜はテーブルに置いた瓶——アルコール度数の高いウィスキーをポンポンと叩いた後、グラスを取りに行く。

スバル「どういう意味だ？」

リオ「それくらい今から話すことは弱っちいオレにとっては大変なことなんだよ」

スバルの疑問に、理桜は情けない笑顔を浮かべて答える。グラスの

中にウイスキーを注ぎ、それを一気に煽った。

スバル「お、おい……そんな勢いよく飲んだらっ！」

リオ「ヘーキヘーキ。だいじょぶだから」

理桜は心配するスバルを手で制止、二人の向かいに座る。

リオ「さて、オレの女性恐怖症になった原因だったな」

奏「ええ、そうよ」

リオ「……簡単に言えば、性的暴行って言うていいのかな？
あえずそれを受けたんだ」
とり

奏「……性的」

スバル「暴行……」

二人は理桜から出た言葉に圧倒される。

リオ「……昔、この辺で連続誘拐事件があったのは知ってるよな？
金持ちの子供を狙っていたってヤツ」

奏・ス「「……っ!？」」

リオ「その様子じゃ知ってるみたいだな。話を続けるけど。オレはその誘拐事件の一つにたまたま、巻き込まれたんだ」

顔を引きつらせる二人に理桜は話を続ける。

スバル「……巻き込まれた？」

リオ「ああ。オレは誘拐現場を目撃しちまったんだ。犯人たちも焦ってな、オレを薬で眠らせて一緒に連れてったんだ」

理桜はスバルの入れたコーヒーに一度、口をつける。

リオ「次に目を覚ましたら、誘拐犯が子供に向かって、ナイフを刺そうとしててさ、頭がハッキリしてもいないのにオレの身体は、誘拐犯と子供の間にあってな」

奏「……まさか、刺されたの？」

リオ「んや、かすただけだった。けど、血が止まなくてさ、誘拐犯たちはまた焦って、オレを別室にいる仲間の所へ治療のために連れてったんだ」

そのときの慌てようは笑えたぜ、と理桜はへらへらした笑いで言った。

リオ「そして、問題がこの後だったんだ」

そう言うのと、理桜の顔が無表情になった。

リオ「……その治療してくれたのがさ、若い女性だったんだけど。ソイツが重度のショタコンだったんだ。それで、小さいオレがドストライクだったらしく……オレに欲情したんだ。――」

♂×♀

「はい、僕。終わったよ」

リオ「おねーさん、ありがとう」

にこっ

「っ!?!?／／／」

幼い理桜が笑顔で礼を言うと、女は衝撃を受けたように顔を赤くさせる。

リオ「おねーさん、かおがあかいけどだいじょぶ? それとなんでふくをぬごうとしてるの?」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとね」

理桜が心配する中、女は服を半脱ぎした。

リオ「どういたしまして。オレ、さっきのへやにもど——」

理桜は何か身の危険を感じたのか逃げようとするが——

ガシッ

リオ「おねーさん？」

女にあっさり捕まってしまった。

「さあ、僕。お姉さんと愉しいことしようね」

リオ「イ、イヤだ……」

「大丈夫だよ、気持ちよくなるだけだから」

服を半脱ぎの状態で理桜に迫り組敷く。

リオ「！？ や、やめ……っ！？」

そして理桜の全身を舐めたり触ったりとして、嫌がる理桜の反応を楽しんでいた。

「今度は僕がする番よ」

……しばらくして、女はそれに満足すると今度は自分の身体を触るように強要してきた。

リオ「イ、ヤだ……たすけて……」

当然、理桜は拒んだ。

「ワガママを言う子にはオシオキしないとね」

リオ「くっ!? ……う、わぁ……がはっ……」

女は笑顔で理桜の首を絞める。

「おねーさんのお願い訊ける？」

リオ「（フルフル）」

理桜は女の問いに苦しみながら懸命に首を振る。

「そう……」

リオ「……ごほっ……はぁ、はぁ……」

女は理桜の首から手を放すと近くにあったパイプを手取る。

「それじゃ、今度はこれよ♪」

「ガンッ！」

理桜「ガッ！？　いた、いよ……」

女は理桜の頭をパイプで殴った。

「僕がおねーさんの言うことを聞いてくれたら止めてあげるよ。どうする？」

理桜が逃げるような素振りや拒絶の姿勢を見せると、女は首を絞めたり、頭を殴ったりと理桜に恐怖を刷り込んでいく。

理桜「お、おねがい！　いうこときくから……もう、やめて！」

最終的に理桜は女に屈することになったのだ。

| n
o
n

s
i
d
e
o
u
t
|

第18話（後書き）

感想など頂ければ幸いです。

第19話（前書き）

リオ「いつの間にか、お気に入りが50件突破してたぞ」

ジロー「こんな小説なのにな……お気に入りに登録してくれたみなさん、ありがとうございます」

第19話

―リオside―

リオ「……と、まあ、これがオレの女性恐怖症になった原因なんだ。ワルいな。気分のワルい話を訊かせて」

オレは話すことに疲れたので、一息つくようにコーヒーを飲む。

奏「……」

リオ「過呼吸や頭痛はそのことがフラッシュバックしてるからだと思うんだ」

スバル「……」

リオ「あの時はさ、どのくらい時間が過ぎたかなんてわからなかった……数分だったのか、数日なのか、オレにとってはどっちも変わらなかったんだ……ただの地獄だったからな。しばらくして警察に保護されたオレは病院に連れてかれた。事件直後のオレは……全ての女性に近付かれるだけであらゆる症状を発症した」

奏「……全ての女性？」

オレのある言葉に奏はすかさず反応した。

リオ「ああ。病院の看護師どころか自分の母親にすらな」

スバル「え……」

リオ「笑えるだろう。自分の母親にもだぜ？ 母さんがあのシヨタコンと同じなわけないってわかってんのに。どこまで、チキンなんだって話だろ」

奏「……リオくん……」

スバル「……リオ……」

ケラケラと笑うオレに二人はどう反応していいかわからずオレの名を呼ぶことしかできないみたいだ。こんな話されて笑えるわけないだろうけど、こういう反応されるのは苦手なんだよな。

リオ「あ、心配はすんなよ。いろいろと頑張って家族に対しては克服したしさ♪ それに自分から触れるのだったら結構平気だしさ♪」

スバル「そう、か」

オレは安心させるように笑顔を作るが、奏は無表情、スバルは複雑そうな顔をしていた。二人にそうされると気が滅入る。オレはいたたまれなくなつて二人の背後に回る。

リオ「おいおい、もう過ぎたことなんだからそんな暗い顔すんなよー。カワイイ顔が台無しだぜ？　な、二人は笑つてる顔の方が断然いいんだからさ♪」

ナデナデ、

奏「あ……／／／」
スバル「むう……／／／」

奏は思わずつて感じに声を漏らし、スバルはなんか拗ねた感じの声を出した。

リオ「なんだ？」

スバル「リオがボクのことを子供扱いしてる気がしてる。」

リオ「そういうつもりはないんだけど……言われてみたら、妹がいたらこんなかなつて感じなのかもしれないな」

スバル「妹なのか？」

リオ「うん、スバルは妹って感じだな。見てて微笑ましいし。オレって一人っ子だからさ。兄弟ってのに憧れがあるんだ」

スバル「兄弟に憧れる気持ちはボクにもあるな」

リオ「なら、今日からオレのことを兄貴だと思ってくれてもいいぞ？」

スバル「……考えておく……」

リオ「お、おう」

バカなことを言うなって、一蹴されるかと思いきや、意外や意外。返ってきたのがなんと保留の言葉だ。そういや、奏が静かなんだけど？

リオ「奏？」

ナデナデ、

オレは奏の頭に乗せたままだった左手を動かす。

奏「……………／＼／」

おー……さつき撫でたときも思ったけど、髪、メツチャサラサラしてる。オレの髪とはえらい違いだな。この綺麗な髪の手入れて大変そうだなー。

リオ「…………ずっと、こうしててえな……」

撫で心地、サイコー♪

奏「リ、リオくん？／＼／」

リオ「んや、なんでもねえよ。それよか早く帰らなくてもいいのか？」

奏「そうね。スバル／＼／」

スバル「かしこまりました」

スバルは恭しく頭を下げると、部屋を出ていった。たぶん、車を呼んでくるんだろうな。

リオ「ってか、奏。なんで顔が赤いんだ？ 風邪か？」

奏「だ、大丈夫よ／＼／」

リオ「そうか。なら、いいんだけど」

奏「……もう、誰のせいだと思ってるのよ……／＼／」

リオ「？」

なんかぶつぶつ言ってるけど、オレ、機嫌そこねちまったか？
あ、効果ないかしんねえけど……。

リオ「奏、これあげる」

オレはゲーセンで取った『爆笑オオカミ』を奏の頭に乗せる。

奏「これはなに？」

リオ「今日、UFOキャッチャーで取ったヤツ。『爆笑オオカミ』。スバルが好きな『沈黙ヒツジ』のシリーズものだってさ。オレ、知らないから奏に帰るとき、渡そうと思って忘れてたんだ。コイツもオレなんかより奏にもらわれた方が嬉しいしな♪」

奏「そう、ありがとう」

リオ「いらなかったら捨てるか、スバルにでもあげればいいからさ」

奏「ううん。嬉しい、大切にするわ」

奏は『爆笑オオカミ』を大事そうに抱き締めて、オレを上目遣いに見上げた。すごく恥ずかしいというか、テレるんですけど／＼／

リオ「お、おう。奏って、ヌイグルミとか好きなのか？」

奏「まあまあ、好きよ」

リオ「そんならさ、UFOキャッチャーでまたなんか取ったらいる？　オレ、よくゲーセン行くし」

ウソだ。ゲーセン、あんま行かねえし。オレ、ゲーセンの魔力に負けて一日三万消費したからな。それから、今日までゲーセンに近寄らなかったし。

奏「くれると言うなら、頂くわ」

うしっ！　オレ、しばらく、あのゲーセン通う。そして、あそこのUFOキャッチャーのヌイグルミ、全種集めてやる！！

奏「はい、リオくん」

リオ「ん、なに？」

奏が差し出した紙に描いてあったのはあの斬新なヒツジの絵があった。

リオ「って、これ、執事券じゃん。いいのか？」

奏「ええ、この子のお礼よ」

リオ「サンキュ♪」

オレは遠慮なく受け取った。スバルになにしてもらおっかなー。

奏「あ、リオくん」

リオ「？」

奏「スバルに変なことさせたら……覚えておいてね♪」

リオ「ハイ、リョウカイデス！」

奏のイイ笑顔にオレは敬礼をした。身の危険しか感じませんけどお
！？

スバル「お嬢様、お待たせいたしました。……って、リオはなんで
敬礼なんかしているんだ？」

奏「気にしないでいいのよ。さ、帰りましょう、スバル」

スバル「はい、お嬢様」

奏「それじゃあ、また明日ね、リオくん」

スバル「それじゃ、リオ。失礼する」

リオ「気を付けてお帰りください」

オレは敬礼したまま、二人を見送ったのだ。

――リオside out――

第19話（後書き）

主従コンビが庭渡家訪問中のジローというと――

ジロー「どうしよう……熊五郎！　お、俺はどうしたらいいんだ！
？　紅羽が近衛を好きだなんて！」

ヌイヌイ……

ジローは熊五郎を修復しながら、紅羽のことで悶々としていた。

熊五郎『恋愛は人それぞれだ。いくら兄貴と言えど、それは口出し
しちゃんらないぜ？』

ヌイヌイ……

ジロー「く、熊五郎！　おまえ、大人すぎる考えだぞ、それは」

熊五郎『ふっ……まだまだガキだな、相棒』

ジロー「……って、熊五郎が喋るわけないだろー！　現実逃避して

る場合じゃないだろうが！！ 助けてくれ、天国の親父ーっ！？」

天国の父親、坂町^{サカマチ} 次郎^{ジロウ}に助けを求め、小さい声で絶叫していた。

第20話（前書き）

リオ「今回はジロー視点で少し短いぜ」

＊加筆・修正しました＊

第20話

—ジローside—

奏「あはははははは♪」

ゲーセンデートした翌日。昼休みの屋上。澄みきった青空の下で、涼月は笑っていた。腹部を押さえながら、酸欠になりそうなくらいに笑い悶えていた。

ジロー「……笑うなよ」

リオ「そうだぞ。事態はかなり深刻なんだ」

できることなら俺だって笑いたいさ。だって信じられるかよ。あの紅羽が、近衛を好きになっちまうなんて……。

奏「ほら、私の言った通りじゃない。結果的にはジローくんの妹さんが、スバルの蹴りでいけない趣味に目覚めちゃったのね」

リオ「なあ、奏。その言い方はやめてやろうぜ？ ジローの顔が可哀想なことになってるから」

ジロー「このままじゃストレスで俺の胃に穴が開く」

そう……すべての原因はあの蹴りだった。いや、決して俺の妹にそんな変態的な趣味があるわけじゃないぞ！

『自分より強い人が好き』

思えば、紅羽は昔からよくそう言っていた。しかし悲しいことに紅羽は我が坂町家の人間——格闘技の申し子である。障害無敗。それこそ、今まで紅羽に勝てる同年代の男なんて誰もいなかった。そんな紅羽が初めて味わった敗北。近衛スバル。

リオ「奏。なんとかならないのか？ 奏だって困るんだぞ？」

文字通り、その強さにずきゅんときちまったんだろう。ただ、問題は……。

奏「いいじゃない。お似合いの二人だと思うわ」

ジロー「……おまえ、本気で言ってるのか？」

奏「多少の障害なんて二人の愛があれば乗り越えられるでしょう？」

リオ「頼むからそういう関係のことでオレに同意を求めないでくれよ！」

ジロー「そんなことを聞くためにおまえをここに呼び出したんじゃないんだよ！」

今ここに近衛はいない……というか、こんな話をしてるのに呼べるわけがない。そんなわけで涼月とリオと俺の三人だ。

ジロー「紅羽は近衛の秘密を知らないんだぞ。それともおまえはあいつらがそういう関係になってもいいのかよ」

奏「あら、最近じゃそういう恋愛も珍しくないんじゃない。意外と近くにそういう趣味の人がいるかもしれないわよ」

リオ「いねえよ！ そんなヤツがホイホイいてもらっても困りますからあー！！」

ジロー「リオ、少し落ち着いてくれ」

リオ「お、おう」

リオは涼月に向かって叫ぶ。そんなリオが面白いのかくすくすと笑う涼月。リオは同性愛とかが苦手だからな。俺だってそうだけど。とりあえずリオを宥めて話を続ける。

ジロー「とにかくだ。協力してくれ涼月。おまえにだって責任はあるんだぞ」

奏「責任？」

涼月は怪訝そうな顔をした。

ジロー「そうだよ。……おまえ、今朝も近衛を俺の家に寄越したろ」

奏「そうね。何か問題があった？」

ジロー「大ありだ。おまえのせいでこっちはえらい目にあったんだよ……！」

奏「？」

涼月は不思議そうに首を傾げてリオを見る。

リオ「なんでオレを見るんだよ。たしかにオレも何があったか知ってるけど、ジローが説明するから」

俺はリオに促されて、今朝起きた事件を説明してやることにした。そう、早朝の坂町家で起きた、あの悪夢のような惨劇を……。

紅羽「おはよ、兄さん」

ジロー「よ、よう、紅羽。どうした？ やけに元気ないけど寝不足か？」

紅羽「うん。なんか胸がドキドキしちゃって眠れなくて」

ジロー「……」

紅羽「そういう兄さんも顔色悪いけど、また寝てないの？」

ジロー「ああ……なんか胸がドキドキして眠れなくてさ」

それと、熊五郎の修繕に全力を注いでたからな。

紅羽「ふえ？　なんで兄さんまでドキドキしてるの」

ジロー「いや……気にするな、ちよつと深刻な悩みがあるだけだ。それよりシャワーでも浴びてさっぱりしてこいよ。俺もあとで浴びるから」

紅羽「うん、ありがと。じゃあ先に使うね」

パタパタと紅羽はリビングから脱衣所へと向かった。数秒後、ガチャリと玄関のドアの開く音。

スバル「おはよう、ジロー」

ジロー「こ、近衛！？　なんで俺の家に！？」

スバル「む。そんなの一緒に登……いや、おまえの監視するために決まっているだろう。それより玄関の鍵はちゃんと閉めた方がいい。リオといい、ジローといい、不用心だぞ」

リオ「昨日のはたまたまだっての。はよ、ジロー」

ジロー「……」

リオ「？　なんでそんな深刻な顔で黙ってんだ？」

スバル「ボクたちが来て何かまずいこともあるのか？」

ジロー「い、いや、別にそんなことは――」

紅羽「兄さ〜ん。お風呂場のシャンプーが切れてるみたいなの。だから押し入れから買い置きをやつを……」

言いながら紅羽はリビングに戻ってきた。半裸で。シャワーを浴びる直前だったのか、下着しか身に着けていない。そんなあられもない姿の妹は、突然の来訪者を見て言葉をなくしていた。

リ・ジ・ス・紅「「「……………」」」

黙り込む俺たち。リビングを静寂が支配する中、リオの顔が真っ青

に変色。紅羽の顔が信号機のように目まぐるしく変色、驚愕に見開かれた両目は一点を凝視していた。もちろん、近衛スバルを――。

紅羽「にゃあああああああつ！」

切り裂かれる静寂。断末魔のごとき悲鳴を上げて、紅羽はリビングから走り去った。逃走経路から言って、たぶん自分の部屋に行ったんだろう。何事もなかったように、再びリビングに静寂が訪れる。回想終了。これが――早朝の坂町家で一人の少女の身に起きた惨劇の全貌である。

第21話（前書き）

リオ「あきさん、紫苑さん感想ありがとうございます」

ジロー「前回に引き続き俺視点だぞー」

第21話

奏「あははははははっ！」

俺の話聞いて、涼月は目に涙を浮かべながら爆笑しやがった。昨日、リオがゲーセンのUFOキャッチャーで取った『爆笑オオカミ』が頭に浮かんだ。ものすごく腹が立つんだけど。

ジロー「笑うなっ！ こっちは大変だったんだぞ！」

事件の後、俺が何を言ってもあいつの部屋のドアが開くことはなかった。リオも紅羽の半裸と遭遇したせいで発作を発症しかけるし……しかたなかったから学園に来たんだが……。

ジロー「大丈夫かな、あいつ」

リオ「あのまま不登校になったりしてな」

ジロー「ありうるな……」

奏「あら、それなら大丈夫よ」

涼月はわかりきったことでも言うように、

奏「だって、そこにいるわよ。あなたの妹さん」

俺たちの背後を指差した。

リ・ジ「「は？」」

振り返ると、そこには屋上の扉。わずかに開いた扉の隙間から、こちらを覗く大きな瞳が――。

ジロー「げっ」

ホラー映画じみた光景に呻き声を上げた瞬間だった。どかんつと扉が開いて、見慣れたショートカットが現れた。我が妹、紅羽だ。

紅羽「探したよ。兄さん、リオ兄」

リオ「お、おま、おま……」

ジロー「いつからそこに……」

紅羽「今さっきかな。それより、どうして兄さんたちが涼月先輩みたいな有名人と一緒にいるの？」

リオ「友達だからだ！　友達なんだから一緒にいるのは普通だろ」

紅羽「……うん。言いたくないんなら言わなくてもいいよ」

リオ「ちょっと待て、紅羽っ！　オレの言葉はスルーなのか！？　スルーなんですかぁ！？　なーってば！　紅羽！　お願いですからオレの言葉を聞き入れてくれませんかねぇっ！？」

リオが本当のことを言ったのに紅羽は聞く耳持たない。必死で抗議するが相手にされない。リオが憐れだ……。

紅羽「あたし、もう全部わかったから」

ジロー「はい？」

わかったちゃった？　なにが？

紅羽「やっぱり……兄さんは近衛先輩と付き合ってるんだね」

リオ「どうしてオマエはそういう方向に話を持ってくんだよ！」

ジロー「どうしておまえはそういう方向に話を持ってくんだよ！」

俺とリオのツツコミがハモる。こいつの思考回路は宇宙にでも繋がってるのか。やけに真剣な表情してると思ったらまた誤解してるのかよ。

紅羽「だって、そうとしか思えないよ。昨日のこともあるし、今朝も近衛先輩が兄さんを迎えに来たしね」

ジロー「そ、それは……」

うう、たしかに。昨日と今朝のことを考えたらそう思われてもしかたないかもしれないけど……。

リオ「なあ、紅羽？ 一応、今朝、オレもいたんだけど……。今朝のオマエの格好のおかげでオレ、発作を起こしかけたんだぜ？ オレの存在消してないか？」

紅羽「それに……兄さんだし」

ジロー「ちょっと待て！ その兄さんだしてのはどういう意味だ！？」

リオ「……あーもういい……オレはいらない子なんだ……どーせ、オレなんか……orz」

リオがイジけてるが、今はそれを宥める余裕は俺にはない。それより大事なのは、妹の中で俺はどうなってるのかをはっきりさせる方が先だ。

ジロー「おまえは俺をどんな兄だと思ってんだよ！」

紅羽「……BL？」

ジロー「うわああああっ！」

なんてこった！ 家族に……実の妹に同性愛者だと認識されてしまった！

紅羽「大丈夫だよ兄さん。あたし、そういう趣味の人にも偏見を持たないように頑張るから」

ジロー「やめろ！ そんな温かい目でこっちを見るな！ 俺は紛れもなく異性愛者だ！」

紅羽が偏見持たないように頑張ってくれても、隣でorz状態になってるリオが「……紅羽が認めようがオレが認めねえ……そうなたらオレが……」とか、ぶつぶつと言ってるんだって！ かなり怖いんだけど……。

紅羽「そうだよね……兄さんは、女の人も好きだったね」

ジロー「『も』ってなんだよ！ 俺が好きなのは女だけだ！ バイなんかじゃねえからな！」

紅羽「はいはい、もうわかったから」

適当にあしらわれた！？ 妹にやられるとかなりダメージがあるんだけど！！

ジロー「わかってない！ おまえは全然わかってないぞ！！」

紅羽「……じゃあ、どういうことなの？ あたしにもわかるように

説明してよ」

ジロー「うつ……」

くそ、説明できるならしたいよ。でもここには涼月がいる。俺が紅羽に近衛が女だってことをバラしたらこの女になにをされるかわからない。もしかしたら洗脳とかされて記憶を消されるかもしれない。紅羽なら洗脳とか簡単にされそうだし。恐る恐る隣を窺うと、涼月は小さく息を吐いた。

奏「わかったわ。こうなったら本当のことを言いましょう」

ジロー「す、涼月……」

奏「しかたないでしょう。ここまで来たらもう隠し通せないわ」

涼月はしっかりと紅羽と向き合った。その口唇がゆっくりと言葉を紡ぐ。

奏「坂町さん。あなたの見解は間違っていないわ。スバルは……あなたのお兄さんのことが好きなのよ」

ジロー「……」

ちょっと待て。いきなりなに言ってんですか、この人!?

紅羽「やっぱり」

頷く紅羽。反論したかったが、俺はショックで口もきけなかった。

奏「でも安心して。ジローさんとスバルはまだ付き合っではないから」

紅羽「えっ……そうなんですか?」

奏「ええ、そうよ。だって……」

涼月は少しだけ間を置いてから、

奏「ジローくんは、この私と付き合ってるんだもの」

なんて。わけのわからないことを口にした。

リ・ジ・紅「「は？」」

ガツンと金属バットで後頭部をフルスウィングされた感じだった。紅羽もリオも同じだったらしく、驚愕に目を白黒させている。

紅羽「いっ……今、なんて……」

奏「聞こえなかった？ 私とジローくんは恋人同士なの。スバルには秘密だけどね」

リオ「……恋人、同士……奏と、ジローが？ ということだ？」

リオがあまりの衝撃だったのかorzから膝立ちになりそう呟いていた。リオから負のオーラが漂ってきてるのは気のせいであってほしい。

—ジローside out—

第21話（後書き）

リオ「おい！ 今回のオレの扱いおかしくないか！？ オレ一応、この小説の主人公だよな！？」

リプトン「ほら、いつもカッコいいとつまないから……たまにはボケもいれとかないと」

ジロー「あれはボケと言うかシカト&放置だったぞ」

リプトン「たまにはいいじゃんか。ああいうのも需要があるかもだから」

ジロー「かもって……適当だな……」

リオ「ない！ 絶対に需要なんてありませんからあっ！？」

第22話（前書き）

リオ「あきさん、紫苑さんいつも感想ありがとうございます！」

ジロー「今回はリオ視点だ」

第22話

ーリオsideー

奏「ジローくんは、この私と付き合ってるんだもの」

リ・ジ・紅「「は?」「」」

ガツンと金属バットで後頭部をフルスウィングされた感じだった。

紅羽「いっ……今、なんて……」

奏「聞こえなかった? 私とジローくんは恋人同士なの。スバルには秘密だけだね」

リオ「……恋人、同士……奏と、ジローが? どういうことだ?」

オレはあまりの衝撃を受けてorzから膝立ちになりそう呟いた。
オレ、なんも訊いてないぞ?

リオ「ちょ、ちょっと待てよ! オレ、なんも訊いてないんだけど
! どういうことなんだよ、ジロー? # ちゃんと、説明しろよ!」

オレはジローの胸ぐらを掴み、問い質す。

ジロー「俺だって知るかよ!? 俺が説明してもらいたいくらいだよ。ってか、なんでおまえは怒ってんだよ!」

リオ「オレとスバルが仲間外れにされたからに決まってるだろ!」

ジロー「そっちかよ! もっと違うことがあるだろうが」

ジローは呆れた感じで言った。オレにとっては結構重要なことなんだぞ。

紅羽「そっ……そんなっ! そんなの嘘です! どうして涼月先輩みたいな人がうちの兄さんと付き合ってるんですか!」

奏「どうしてって、私がクラスメイトと付き合っちゃいけないのかしら」

紅羽「そ、そういうわけじゃないんですけど……!」

うーっと紅羽は唸った。見たところ全然納得してないっぽいな。そ

りやそうだ。オレもわけわかんねえし。ジローも状況把握しきれてねえし。

紅羽「なんで、リオ兄じゃなくて、うちの兄さんなんかと付き合ってるんですか!?!」

ジロー「おい、紅羽!　なんかとってのはなんだ!?!　今のはどういう意味だ!?!」

紅羽「それに、兄さんが涼月先輩と付き合っているのならリオ兄が知らないなんておかしいです!」

ジロー「紅羽、訊けて!　今度は俺のことをスルーするのか!?!　おいってば!　紅羽、応えろっ!」

紅羽は実の兄貴に対して失礼な言い種の上、兄貴の問い掛けを見事にスルーしてやがる。

奏「それはしかたないわ。私がリオくんには秘密にして欲しいと、ジローくんをお願いしたの」

紅羽「どうしてですか?」

奏「あまり言いたくないんだけど……言っていいかしら」

リオ「なんだよ？」

奏がオレにそう訊いてきた。オレなんかしたっけ？

奏「私、リオくんに告白されて断ってるの……」

リ・ジ・紅「「はあ!？」」「」

奏の放った爆弾にオレたちの声が揃った。お、おい？ オレ、いつ、奏様に告白しましたっけ？ ってか、知らないうちにフラれてるんですか、オレ!？

ジロー「おまえ、なんてチャレンジャーなことをしたんだよ」

リオ「ち、違う！ そんな事じ——『オ、オレの初めての女になってください!』——っは、な、い?」

今のはオレの声じゃね？ ってか、あんときのセリフじゃねえか！
? (第7話参照) いつの間に録音してたんですか！

奏「リオくん……ショックだったからって無かったことにするなんて酷いわ」

奏はボイスレコーダーを片手に持って、哀しげに言った。このお嬢様、怖い……目が楽しげに笑ってますけどっ！

紅羽「……リオ兄……」

ジロー「……おまえ、すごいよ……」

リオ「だから、違うって言ってますよねえ!？」

坂町兄妹がぼんつと肩を叩いてオレを励まそうとする。

ジロー「もう、なにも言わなくていいって」

リオ「だからっ!」

なんで、オレの周りは人の話を訊かないんだ!？

紅羽「でも……やっぱり信じられません！　ちゃんとした証拠でもない限り、そんな話を信じられるわけが――」

奏「わき腹の痣」

その言葉に、紅羽は銃弾でも撃ち込まれたみたいにピタッと固まった。

奏「ジローくんって左のわき腹のところに痣があるでしょう。私がそれを知っているのが確固とした証拠よ」

紅羽「そっ、それはどういう意味ですか？」

奏「あら、聞きたいの？」

くすつと奏は笑う。

奏「私がジローくんの服を脱がせたからよ。もちろんベッドの上でね」

全く表情を変えずにとんでもないことを言い放つ奏様。爆弾発言が

好きだな、このお嬢様。

リオ「……ジロー、やっちゃったのか？ あ、ゴメン、間違えた。やられちゃったのか？」

オレは小さくジローに訊いた。

ジロー「そんなわけねえだろ！？ おまえと同じことされたんだ！」

それにジローも小声だったが、必死に弁解してきた。ジローがそんなことできつかよ。ただのチキンだし。奏に実験という、イジメを受けて脱がされたんだろう。やっぱりジローの反応は面白い。

リオ「じょーだんだって」

しかし、そんなことは全く知らない紅羽は、顔を真っ赤にして茫然としていた。

紅羽「そ……そんな……ベッドって……」

奏「言ったでしょう？ 私とジローくんは付き合ってるの。だってら別に普通じゃない」

紅羽「う……………うそ……………兄さんが……………」

紅羽はぐるぐると目を回しそうだった。ちなみにジローは疲労困憊だ。

紅羽「でっ、でも……………兄さんは女の人に触られるのが苦手で……………」

……………おい、ジローを女性恐怖症にしちゃった一人がそれを言っちゃいますか、紅羽よ。

奏「大丈夫。多少の障害は二人の愛があれば乗り越えられる。少なくとも私はそう思ってるから」

だいじょぶだ、紅羽。心配する必要はないぞ。奏とジローの二人の間に愛なんか一ミクロンも存在してないから。オマエが想像してたようなピンクなことは起こってないよ。だから、ジローはまだ大人の階段は登ってないぞ。

紅羽「……………」

しかし、そんなことを知らない紅羽には奏の言葉がかなりショック

だったのか、もはやひっくり返る寸前に追い込まれていた。タオル
があったら投げ込まれているな、うん。

第23話

奏「でも……だから、私はあなたを応援したいの」

紅羽「……え？」

先程と打って変わって、奏は優しい口調で囁いた。

奏「スバルにはちゃんと女の子と恋愛して欲しい。あの娘の主としても、ジローくんの恋人としても、私はそう思うの。だから、坂町さん」

懷からチケットのようなものが取り出される。今度は執事券じゃない。それは、最近この近くにリニユアルオープンしたレジャーランドの入場券だった。けど、どうして四枚もあるんだ？

奏「今週の日曜日、遊びに行きましょう」

紅羽「遊びに……ですか？」

奏「そう、ダブルデートって言えばいいかしら？ 私とジローくん。スバルとあなた。ね？ とっても楽しそうでしょう」

奏はにこやかに微笑みかけた。そこにいたのは間違いなく涼月奏。学園一の美少女。perfectなお嬢様としての彼女の姿だった。

奏「坂町さん……いいえ、紅羽ちゃん。私はあなたに頑張って欲しいの。だから精一杯応援するわ。だって……あなたは将来、私の妹になるかもしれないんだもの」

完璧なスマイルとともに、奏はトドメの弾丸を撃ち込んだ。決まったな。誰が見ても勝敗は明らかだ。

紅羽「わかりました、涼月先輩。……いえ、お姉さま」

何かを決心したのか、紅羽は小さな拳をぎゅっと握り締めた。

紅羽「あたしが必ず、近衛先輩をいけない道から救い出してみせますっ！」

待て！ 待つんだ、紅羽！ オマエが頑張ったらそれこそ、スバルがイケない道に走ってしまいますからあ！？

奏「ふふ、ありがとう紅羽ちゃん。期待してるわ」

がっしりと。紅羽と奏は固い握手を交わした。どうやら、二人の間には言葉では表せない強い絆が結ばれたようだ。まあ、なんつか。涼月奏。やっぱりこのお嬢様、ただもんじゃないわ。あの坂町家のリトルモンスターである紅羽を、完璧に手懐けやりましたよ。

紅羽「それじゃお姉さま。あたしはそろそろ教室に戻ります。日曜日、楽しみにしてますから！」

ぶんぶん元気な手を振りながら、紅羽は屋上から去っていった。それを見送ってから、ジローが奏を呼ぶ。

ジロー「……おい、涼月。」

奏「なあに？ ジローくん」

ジロー「さっきの話って……」

奏「ええ、まったくのデタラメね。あのチケットも偶然手に入ったものよ」

リオ「デタラメで……」

何事もなかったように言う奏。魔王だ。優等生の仮面を剥ぎ取って、今ここにサタン奏が再臨していた。

奏「だって、しかたないでしょう。あのまま話をしていたら、ジロ―くんがスバルの秘密をバラしちゃいそうだったし」

リオ「そりゃそうだったかもしれないけど。……なあ」

ジロ―「だからって、おまえと俺が付き合ってるなんて……」

奏「別に大丈夫よ。あの娘が周りに言いふらすタイプには見えなかったしね」

リオ「たしかにアイツはそういうタイプじゃないけど……」

オレが心配なのはジロ―の身なんだけど。もし、こんなことがスバルにバレたら主に手を出した害虫と見なされてツブされるんじゃないのか？

ジロ―「それに……なんでまた遊びになんか行くんだよ」

奏「あら、だって……」

奏はくすくすと笑っていた。

奏「すっごく面白そうでしょう。こんなおかしなシチュエーションは生まれて初めてよ。ああ、日曜日が楽しみでしかたないわ」

ジロー「……さいですか」

ジローは半ば諦めた感じだった。なんだろう。だんだん奏っていう人間がわかってきた気がするよ。つまりコイツは、面白くて笑えることが大好きなんだ。箱入りのお嬢様だから案外そういうことに飢えてんのかもな。退屈を嫌い、常に自分を楽しませる何かを求めて、その為には手段を選ばない。典型的な愉快犯、真の意味でのトラブルメーカーだ。まったく……これじゃ魔王や悪魔っていうより小悪魔だよ。背中にパタパタと黒い羽が見えても不思議じゃないぜ。

奏「それに、これはあなたたちの女性恐怖症を治す一環でもあるのよ」

奏はそれこそ小悪魔のように微笑んだ。

奏「頑張ってね、私の恋人役。気をつけないと、出血多量で死んじゃうわよ？」

ジロー「……お、おう」

奏に上目遣いで顔を覗きこまれて、ジローはそっぽを向いた。オレはその光景に少しばかりムツときた。ジローの顔を覗きこんだときに見せた奏の笑顔は……教室で見せるものよりずっと、ずっと可愛かったのだ。それがオレではなくジローへ向けられたのがほんの少しだけムカついた。

リオ「……死因が鼻血だと情けなさすぎるからな。頑張れよ、ジロー」

ジロー「お、おう……。って、リオは来ない気かよ？」

リオ「……あいにく、オレは日曜日は予定があるんでな」

予定なんてねえよ！　けど、奏とジローの恋人ごっこを見るだなんて、なんか面白くないし。なにより、行ったらロクな目に遭わないとオレのシックスセンスがそう告げてるんだ。

リオ「ダブルデートなんだろう？　ジャマしちゃ悪いし」

ジロー「待て！ 俺を見捨てないでくれ！？ 俺一人でこいつら三人を相手にするのはどう考えても無理があるだろ！」

リオ「知るかよ。それにオレの分の入場券はないみたいだから、今回は遠慮するよ」

ジローが必死にオレの肩を掴むけど、オレはそれを払う。

奏「……日曜日までにやることができたわね」

はあっと深々と息を吐く音が聞こえた。……ため息？ あの奏がため息をついたのか？

奏「どうやってスバルを説得しようかしら。ちょっとだけ憂鬱ね。あの娘、私が遊びに出掛けるのをとつても嫌がると思うから」

リ・ジ「……？」

オレたちには彼女の言葉の意味がわからなかった。そう、このときのオレは、まだ気づくことができなかった。彼女の――涼月奏の憂鬱の理由に……。

—リオ side out—

——non side—

リオ「オレたちもそろそろ教室に戻ろうぜ」

ジロー「そうだな」

理桜は立ち上がるとすたすたと出口に向かう。

ジロー「ほら、涼月も行くぞ」

近次郎は未だにベンチに座ってる奏に声をかける。

奏「ジローくん」

ジロー「どうした？」

奏「日曜日は必ずリオくんにも来てもらおうから安心してね。どんな手段を使っても来てもらおうから」

ジロー「は、はい」

リオ「なにやってんだよ、二人とも。早く行こうぜ」

奏「ごめんなさい、今行くわ」

ジロー【リオ、おまえの身になにが起るかわからんが、デビル涼月に気をつけろ】

理桜に呼ばれ、奏は理桜の隣に行く。そんな二人を見て近次郎は心の中で理桜の身を案じた。後に、近次郎はこう語っていた。『あのときの涼月はそれこそ悪魔のように笑っていた』

— non side out —

番外編 クリスマスSS (前書き)

リプトン 「クリスマス番外編！」

リオ 「本当は書くつもりなかったらしいけどな」

ジロー 「ま、かなりグダグダだったからな」

リプトン 「うるちゃい！」

リオ 「まあ、番外編だから読んでも読まなくてもだいじょぶだ」

番外編 クリスマスSS

リオ「クリスマスか……」

オレはカレンダーを見てそう呟いていた。

ジロー「しみじみと言うなよ……」

リオ「いや、だってさ……なにが哀しくて男のオマエとゲームやってクリスマス過ごさなきゃなんないんだ？」

そう、今日は12月25日、クリスマスだ。そんな日なのに、オレはジローの部屋でジローと格ゲーをしている。オレにはクリスマスを過ごすカワイイ彼女はいないから……。

ジロー「しかたないだろ。紅羽も友だちとクリスマスパーティーするって出掛けたんだから。それに……」

リオ「なんだよ」

ジロー「勇気を出して涼月を誘ったけど断られたんだろ」

リオ「ぐっ……」

そうなのだ。せっかく友だちになったから頑張って誘ったんだ。もちろんダメ元で誘ったから全然！これぼっちもキズついてなんかいないんだからな！

リオ「うるさい！ 奏は涼月家主催のパーティだったからムリだったんだよ！？ オマエだってスバル誘ったんだろ」

ジロー「……俺は誘ってねえよ」

リオ「このチキンヤローが！」

ジロー「うるさい！ リオだってチキンだろうが！！」

リオ「言いやがったな！ 誘わなかったオマエよりはマシだ！！」

ジロー「涼月がパーティならその執事の近衛だって無理だろうが！」

オレたちは格ゲーでバトリながら言い合いをするオレたち。淋しい

……淋しすぎる……。

♂×♂

リオ「ただいま……」

ジローとゲームしてるのは虚しくなったから自宅に帰ってきた。くっ……一人は嫌だ……クリスマスなんて滅びてしまえ（泣）

リオ「もういい……ふて寝してやるっ！」

腹も減ってるけど、なにもする気はないから寝る！ オレは部屋に
もうダッシュしてベッドに潜り込んだ。

「きやつ!?!」

……。

………。

………。

きやつ!?! って聞こえたよな？ ベッドも暖かいし。え？ なに

？ この家、オレ以外いないはずだよな？ こわっ！？

リオ「誰かいるのか？」

オレは恐る恐る毛布をひっぺはがす。

「はあい、リオくん♪」

リオ「！？／／／」

にこやかに挨拶をする人物にいきなり赤面した。

リオ「な、なんで、ここにいるんだよ！ 奏！？」

そう、オレのベッドにいたのは涼月家主催のパーティーに出席しているはずの奏だった。

奏「あら、いけない？ あなたにクリスマスを誘われてたから来たのよ？」

リオ「そうじゃないけど……。だって、パーティー……」

奏「退屈だったから来ちゃった♪」

リオ「来ちゃった♪ ……って、オレは嬉しいけど、だいじょぶなのか？」

抜け出してきたってことだろ？ それは心配なんだけど。

奏「心配ないわ。置き手紙を置いてきたから」

それって、スバルにも言わずに抜け出したってことだよな？ 果てしなく、不安です。

奏「それより、リオくん」

リオ「？」

奏「どうして鼻を押さえているのかしら？」

リオ「な、なにもないぞ」

奏、今の自分の格好を知って言ってんの？ 奏の格好は肩が出ていて、スカートの丈もかなり短い。色々際どい、かなり露出の高いサント服なんですよ？ 鼻血が出そうなんですけどっ！

奏「ふふ。なんでもないなら鼻を押さえるのやめて欲しいわ」

リオ「やめるから、近付くのやめてもらえませんか？」

奏が小悪魔な笑みを浮かべて、オレに迫ってくる。い、色々ヤバイってば！？

リオ「お、お願いしますから！？」 聖なる夜に悪夢を見るようなことは勘弁願いたいんですう！？」

奏「嫌よ。私だって、我慢してたのよ」

リオ「へ？ ガマンってな——」

オレは言葉が続かなかった。だって、あの奏が優しく抱き締めてきたんだぞ？ 発作の方は奏の治療プログラムのおかげでだいぶ改善できたから、これくらい平気だぞ。

奏「あなたがパーティ会場まで迎えに来てくれると思ったのに」

リオ「いや、そんなこと言われても……」

パーティ会場知らないし、奏に迷惑になることしたくないし。

奏「……チキング……」

リオ「今は、関係ないだろっ!？」

やめてくれ、オレの心をえぐるな!

リオ「……それより……なんでそんな格好で、オレのベッドにいるんだよ?」

奏「プレゼントを届けに来たのよ」

リオ「マジで? サンキュ。で、そのプレゼントは」

奏「わ・た・し♪」

奏は抱き締めたまま、オレの顔を覗きこんで、可愛い笑顔でそう言った。

リオ「!/?」　　／／／　　そ、そういうじょーだんはやめてください／／／
／　心臓に悪いです／／／　　クリスマスに奏に会えただけで嬉しい
ですからぁ／／／　　「」

奏
 $\left[\begin{array}{l} \diagup \\ \diagdown \\ \diagup \\ \diagdown \end{array} \right]$

オレの言葉に奏も顔を赤くした。ヤベツ、メツチャカワイイんすけど……。

リオ「あ」

奏「？」

オレも奏にプレゼントあったんだ。

リオ「はい、クリスマスプレゼント」

奏「ありがとう」

枕横に置いておいた包みを奏に渡す。

奏「開けていいかしら？」

リオ「どうぞ」

奏は丁寧に包装を解いていく。現れたのは少し濃い蒼いリボンだ。店員さんに色々訊いて選んだんだ。

奏「……可愛いリボン……。着けていいかしら？」

リオ「え？ いいよ？」

奏はオレの返事を訊いてから、リボンを着け替える。髪をおろしたとき、一瞬だけドキッとしたのは内緒だ。

奏「どうかしら？」

リオ「すっげー、カワイイ／＼／＼　ってか、奏はなに着けても似合

うよ」

不安そうに訊く奏にオレは即答した。

奏「……ありがとう。大切にするわ」

リオ「そ、そうか？ でも、奏、色々高価なプレゼントもらってる
だろ？ なんかショボくて——」

ゴメンな、と続ける言葉が遮られた。奏の綺麗な人指し指がオレの
口唇に当てられたから。

奏「そんなこと言わないで？ どんなに高価なものでもらおうと、
リオくんのくれたものには敵わないのよ。だから、ね？」

リオ「お、おう／＼／」

奏は幼い子供をあやすように優しく言った。え？ なんだよ、これ。
奏がいつもよりカワイイんだけど。いや、いつもカワイイんだよ？
だけど、今日は半端ないよ？

奏「リオくん」

リオ「な、なに？」

奏「M e r r y X m a s」

リオ「ああ、M e r r y X m a s、奏」

奏は少女のような笑顔だった。いろんな笑顔を見せてくれるな、奏。これがクリスマスプレゼントって言われても全然いいかも。今年は今までにない、最高のクリスマスかもな。

番外編 クリスマスSS（後書き）

リプトン「ひとつだけ心配があるんだ」

リオ「なんだよ？」

リプトン「奏のキャラ崩壊してない？」

リオ「ゴメン、今更だから」

リプトン「え？ マジで？」

リオ「マジ」

第24話

ージローsideー

ジロー「いやー、いい天気だな♪」

日曜日。天気は狙ったかのようにぎんぎんの快晴だった。まあ、雷が鳴ろうが雹が降ろうが今日、俺たちの行く施設にはあまり関係ないんだけど。全天候型レジャー施設。その魅力はなんと言っても充実した屋内設備だろう。いくつものプールとアトラクションを完備した温室ドーム。人工的に作られた常夏の楽園。^{パラダイス}春だろうが冬だろうがエンドレスサマー。まさに、都会にできたオアシスだ！

紅羽「……兄さん。ニヤニヤしすぎ」

目的地の最寄り駅の改札を抜けた瞬間、紅羽は呆れた声で言った。

紅羽「楽しみなのはわかるけど、そんな顔してるとロシア軍のパラシュート部隊にスカウトされちゃうよ？」

ジロー「されねえよ。それにこんなところにロシア軍のスカウトもいない」

言いながらも、確認するように自分の顔を触る。妹の指摘通り、心

なしか口元がにやけてる気がした。まあ、しかたがないさ。だって、デートだぜ？ ニセモノとはいえ、休日に彼女とデート。女性恐怖症を治す為といえ、女の子とデート。しかも涼月は外見だけなら超絶美人だ。男子高校生ならテンション上がって当然だろ？ 恐怖症のせいでこんなことは一生無理だって思ってた俺ならなおさらだろ。

紅羽「もう、わかってるのかな。今日のデートの目的はあたしと近衛先輩が仲良くなることなんだから、ちゃんと協力してよね」

ジロー「ああ、わかってるわかってる」

紅羽「ホントかなあ」

紅羽は不満気にぷうっと頬を膨らませた。

ジロー「そういや昨日、涼月と電話で喋ってたみたいけど、なに話してたんだ？」

紅羽「はにゃ？ そんなの作戦会議に決まってるじゃん」

「……」

おい、なんて不吉なこと言ってんだこいつ？ 高潮していたはずの
テンションが急転直下に暴落してしまった。ていうか、あの屋上で
の出来事以来、こいつらめっちゃくちゃ仲良いんだよなあ。友好を深
めるなんてレベルじゃなくて、それこそ見てて気味が悪くなるくら
いに。

紅羽「実はもう色々と準備してるんだ」

ジロー「ふうん」

紅羽「ちなみに兄さんのバッグにも仕掛けがあるから、不用意に開
けちゃダメだよ」

にやははっと笑う妹。俺はマッハで肩にかけていたバッグを開けた。

紅羽「ああっ！ ダメだよ兄さん！ 近衛先輩のいるところで開け
なくちゃ意味がないのに！」

騒ぐ紅羽を無視してゴソゴソとバッグを探る。迂闊だった。もしか
したらプラスチック爆弾とか仕掛け——って、なんだこれ？ 雑
誌？ よく確認しよう。バッグから引っぱり出すと……。聖典《エ
ロ本》だった。しかも、俺の部屋に隠してあるはずの秘蔵コレクシ
ョンの内の一冊だった。

ジロー「うおおおっ!？」

叫び声を上げながら、出てきたブツを間髪入れずに近くのゴミ箱へと叩き込んだ。……さよなら、俺の秘蔵っこ。

紅羽「うわっ、ひどいよ兄さん！　せっかく準備したんだよっ!」

ジロー「うるせえ！　ひどいのはおまえだろっ!？　おまえは人のバッグになんてもんを入れてくれてんだよっ!？」

勝手に部屋漁られたあげく、聖典を持ち出されたんだぞ！　実の妹に発見されるとか恥ずかしくて死ねるわ！

紅羽「ええゝ。じゃあなんなら良かったの？　メイドさんのやつ？」

ジロー「やめろ！　こんな往来で兄の趣味を暴露するな!」

紅羽「せっかく近衛先輩にあの本を見せて『ほら、うちの兄さんは変態なんです！　見てくださいこの本！　ネコミミですよネコミミ!』って叫ぶつもりだったのに」

ジロー「おまえは実の兄貴の人生を終わらせる気か!？」

紅羽「うう……これで近衛先輩に兄さんは女の人が好きだってわかってもらえると思ったのに……。一生懸命お姉さまと考えたのに……」

がつくりとうなだれる紅羽。……甘かった。考えてみりゃあの涼月と紅羽がタッグを組んでるんだ。どんな化学変化が起きようと不思議じゃない。

紅羽「でも、これで終わったと思わないでよね。まだまだ仕掛けはいっぱいあるんだから」

紅羽はメラメラと邪悪な闘志を燃やしていた。……怖っ。こいつの行動力と涼月の頭脳が合わさっていると思うと軽く発狂しそうだ。これは本気で対策を練る必要があるな。強烈なボケをかます二人がコンビを結成しやがったんだ。このまま一人でツツコミに回るだなんて到底太刀打ちできやしない。ここはリオと近衛とタッグを組むしかない。せめて二対三にして、数の暴力でねじ伏せるしかない!

ジロー「……って、リオは本当に来るのか?」

不安だ。限りなく不安だ。あの屋上でのリオは何があっても行かない! という意思表示してたし。微妙に機嫌も悪かったしな。ああ

なったりオは簡単に考えを変えないし。でも、できれば来て欲しい。
俺一人で女三人の相手は無理だ！

紅羽「それは安心して」

ジロー「？」

紅羽「お姉さまとちゃんと会議したから！ リオ兄がいくら逃げようとしてもムダだもん！！」

ジロー「……そう、か……」

グッとサムズアップする紅羽。……リオ、ご愁傷さま。やっぱり紅羽と涼月を組ませるのは危険だ。『混ぜるな！ 危険っ！！』って、立て札が今すぐに必要だ！

紅羽「あ、お姉さまと近衛先輩だ」

駅から歩くこと数分。待ち合わせ場所に指定したレジャーランドの入り口に見なれた二人組の背中を発見。近衛と涼月だ。どうやら、何か話し込んでいるらしく、二人ともこっちに気づいてない。にしても、リオの姿が見えない。涼月から逃げ切れたのか？ リオがいないならしかたない。こうなったなら、近衛だけでも味方にしなけ

れば。あいつにまでボケに回られたら三対一。それこそ涼月の喜び
そんなシチュエーション……別名、俺にとっての地獄！ の完成だ。
それだけは、なんとしても阻止しなくては……っ！

ジロー「よお、近衛」

精一杯の愛想笑いを作って、背後から近衛の肩をポンと叩く。これ
で「やあ、ジロー。今日はいい天気だな」みたいな挨拶が――

ジロー「ぐはっ!？」

返ってきたらなんて思った瞬間、いきなり、首を掴まれた。

ジロー「……」

えーっと、なにこれ？ 近衛なりのジョークかな？

スバル「動くな。動いたら容赦なく握り潰すぞ」

近衛は真剣な顔で右手に力を込めた。そのまま目を細めて確かめる
ように俺の顔を睨み付けた後、ふうっと息を吐き出す。

スバル「ジロー。迂闊にボクの背後に立つな。危うく再起不能にするところだったぞ」

何事もなかったように右手が首から放れる。俺はショックで動けなかった。

ジロー「あ、あの、近衛さん……」

スバル「ジロー……気をつけろ」

ジロー「なにをだよ」

スバル「敵は、どこに潜んでいるのかわからないからな」

ジロー「敵って……おまえ……」

軽く周囲を見回す。俺たちの周りにはレジャーランドに来た家族連れやカップルやらで溢れていた。別にどうってことはない。平和でほのぼのとした日曜日の光景である。

スバル「もし複数の武装した敵が現れたら、ボクはお嬢様をお護り

するので精一杯だ。だからすまないが、ジローもリオも自分の身は自分で守ってくれ」

スバル様は刃のようにぎらぎらした目付きで周囲を警戒していた。はつきり言って浮いている。どう見てもレジャーランドに遊びにきた人間の顔じゃない。ピンの抜けた手榴弾みたく殺気立ってるぞ。……って、今、リオって言ったよな？

ジロー「おい、涼月」

奏「なにかしら、ジローくん」

ジロー「姿が見えないけどリオのやつ、来てるのか？」

奏「何言ってるの？ リオくんならずっというわよ？」

ジロー「は？ どこだよ？」

奏「下よ、下」

ジロー「下？……って、ぶふっ!？」

涼月が指差す方へ視線を向けると俺は吹き出してしまった。そこには笑える姿のリオが鎮座していたのだ。

第25話

リオ「……なんだよ？#」

ジロー「い、いや……ぷっ、くくくっ……」

俺と目が合うといかにも不機嫌です、といった声を出し、俺を睨むリオ。だが、格好が格好だけに怖さなんて微塵もない。ってか、笑いを我慢するのがきついんだけど。

リオ「んだよ……言いたいことがあるなら言え。それと笑いたきや笑えよ！　ちゅーと半端に笑われる方がどれだけ傷つくと思うんだ！？#」

それじゃ、リオからお許しを得たことだし遠慮なく。

ジロー「ぷっ……あははははっ！？　な、なんなんだよ、その格好！　あは、あははははっ！？　い、犬？　犬なのか！？」

俺は腹を抱えて、リオに指差しながら笑った。爆笑だ。だって、ワンスタイルのリオが行儀よく『おすわり』してるんだぜ。あのリオがだぞ。

奏「可愛いでしょ？　これね、私と私のメイドがリオくんのために頑張って作ったの。どうかしら？」

リオは自分の髪色と同じ色のキグルミを身に纏っていた。直立二本足で歩くワンちゃんのキグルミ。パーカーみたいなデザインで顔が出るタイプだ。それに灰色の耳とシッポが装着している。

ジロー「あ、あははははっ！？　に、似合ってるぞ、リオ！」

リオ「やっぱり笑うなあゝ！？　#　ムカつくだよっ！」

びしっ、と指を指したんだろうが、俺の目にはぷにぷにした肉球が見えただけだった。

ジロー「ぎゃはははっ！　な、なに？　これって、シベリアンハスキーをモデルにでもしてんの？」

奏「そうよ、よくわかったわね。ジローくん、犬に詳しいの？」

ジロー「い、いや……そうじゃ、ない、けど……あはっ……あははははっ！？」

やばい、笑いすぎて腹が痛い。

リオ「笑うなって言ってますよねえ！？#」

がるるると、唸るリオは今にも俺に飛びかかりそうな感じだった。

ジロー「あははははっ！」

リオ「ジロー、ころ——ぐぎゃっ！？」

ってか、実際に飛びかかりやがった。だけど、それは俺に届くことなく変な奇声が聞こえただけだった。

奏「だめよ、リオきゅん。今から遊びに行くのにジローを殺そうだなんで」

リオ「☆●×▽♪＊！？（約…オレが死ぬわ！？）」

リオの首にはめられてる首輪に鎖が繋がれていた。その鎖の先は涼月の手に握られていた。リオが飛びかかった瞬間に引っ張ったようだ。普通だったら死ぬるぞ？

奏「ジローくんも笑いすぎよ。リオきゅんが怒るのもしかたないわ」

ジロー「……悪かったよ、リオきゅんw」

紅羽「兄さん、謝る気ないよね」

リオきゅんだって。リオきゅんってなんだよ。あー、笑いすぎて涙が出たよ。黒瀬のやつにも、今のリオを見せたい！

リオ「はあはあ……マジで、……はあ……ころし、てやろうか？#」

ジロー「……うん、本当にごめんなさい。だから、そのオーラをしまってください」

息を整えるリオからはとてつもない黒いオーラが溢れていた。やばい、マジギレに近い……。

奏「さて、今日は楽しみましょう。せっかくスバルを説得してここまで来たんだから、遊ばなくちゃ意味がないわ。リオきゅんも頑張っ
て連れて来たんだしね」

リオの黒いオーラを気にするもなく涼月は続けた。さすが、デビル涼月。

奏「そうよね、紅羽ちゃん。ほら、緊張しないで」

紅羽「は、はい、お姉さま」

俺の後ろで返事をする紅羽……って、ガチガチに緊張してるなあこいつ。

紅羽「こっ、こここ近衛先輩。きよっ……今日は、その……よろしくお願いしますっ」

うえー、なんかショック。俺にはおやすみ代わりにリアットをかますくせに、こうしていると普通の女の子にしか見えない。

リオ「……これが恋のパワー……あのリトルモンスターをこうも大人しくさせてしまうのかよ……」

『おすわり』しているリオもなんかショック受けてるし。

ジロー「この様子なら大丈夫か」

俺は安堵した。紅羽には悪いが、この緊張っぷりじゃ近衛と打ち解けるのにも時間がかかるだろう。とりあえず、今のところはこいつらが百合な関係になるのを阻止する必要はなさそうだな。

スバル「……どこからでもこい……お嬢様はボクが……」

しかし、油断はできん。なにせ頼りにしていた近衛がこの通り、一番壊滅的なのだ。状況は恐れていたパターンへと急行している。

ジロー「なあ、リオ」

こうなったらリオと結託して、二対三にしよう。

リオ「なんだよ#」

返ってきたのは恐ろしく低い声。まずい、このままだとリオにまで裏切られる。

ジロー「まだ怒ってるのな。今度、なんか奢るから許してくれ」

リオ「奢るより、これを脱ぐの手伝え。一人じゃ脱げない仕組みになってるらしいんだ」

ジロー「どうすればいいんだ？」

リオ「まず、首輪を外してくれ。ワンワнтаイムから一刻も早く解放されたい」

俺は言われた通りに首輪を外した。……見ると首輪に『リオきゅん』と書いてあった。デビル涼月、ほんとにリオをペットにでもする気かっ!？

リオ「どうした？」

ジロー「なんでもない」

これはリオに言わない方がいい。知らない方が幸せだ。

リオ「そうか。それで、首のところに小さなボタンあるはずだから、それを押してくれ」

ジロー「これか」

ポチっと、音がしてジッパーが自動に落ちる。

リオ「サンキュ。やっと解放されたぜ♪」

リオは嬉々としてシベリアンハスキーのキグルミを脱いだ。

ジロー「なにがあっただ？」

リオ「……き、聞くな。思い出すだけで身体が震える」

リオが言った通り、身体が震えていた。本当になににされたんだ？
ものすごく気になる。デビル涼月はなにをしたんだ？

リオ「……一つだけ言っておく」

ジロー「なんだ？」

リオ「……男ってのは無力だ……」

ジロー「うん、わかった」

遠い目をするリオからは悲壮感しか感じなかった。これは、もう触れるのはよそう。

奏「それじゃ、そろそろ行きましょう。いつまでもここにいたんじや時間がもったいないわ」

スバル「そうですね」

涼月の先導でレジャーランドへと入る。その際、逃げ出そうとした諦めの悪いリオを近衛が涼月の命令に従い、いとも簡単に落としたのはまた別の話だ。

第26話（前書き）

リオ「今年、最後の投稿だ」

ジロー「今年はありがとうございました」

リプトン「来年もよろしくお願いします」

第26話

リオ「…………マジでいてー…………」

リオが腹をさすりながら、更衣室に向かって歩いていく。当然、男女別なので涼月と紅羽と別れた。待ち合わせは更衣室を出たところになった。

ジロー「リオが逃げるから悪いんだろ」

俺は呆れながら腕に着けるタイプの一日フリーパスを装着する。

リオ「オマエだってオレの立場になれば同じことするに決まってる」

ジロー「否定はしないけどな」

リオ「だろ？　まあ、ここまできたらもう諦めるけど」

更衣室を抜けたら真夏の王国が待っている。そう考えるとまた気分が高揚してくるんだから俺の精神回路も単純なもんだ。リオも心なしか機嫌が直ったみたいだし。

リオ「そういや、ジローは昔から泳ぐの好きだったよな」

ジロー「ああ♪ さっさと着替えて泳ぎに行こうぜ」

意気揚々と更衣室に入ろうとすると——急に、後ろから上着の裾を引っ張られた。振り返ると、近衛が母親にすがりつく幼い子供みたく俺とリオの上着をぎゅっと掴んでいた。

リオ「スバル？」

スバル「リ、リオウ……ジ、ジロウ……／＼／＼」

気のせいか、顔がやけに紅潮している。

ジロー「？　なんだ。忘れ物でもしたか？」

スバル「い、いや……その……／＼／＼」

なぜか、耳まで真っ赤にして黙ってしまった。なんだろう。もしかして急に具合でも悪くなったのかな、とか考えていたら、ふと——重要なことを思い出した。近衛って、女じゃん。

リ・ジ「……………」

絶句する俺たち。これは……………どうしたらいいんだ。

リオ「……………そういえば、体育の着替えとかでもスバルって教室にいなかったよな」

ジロー「きつと、そういうときはどっかに隠れているんだろうけど」

俺たちは近衛に聞こえないように小声で話す。

リオ「今は隠れる場所なんてないよな」

先に進むにはこの更衣室を通過するしかない。

ジロー「……………わかった。俺たちが引っ張ってくからおまえは目を閉じてろ」

リオ「それなら入れるだろ？」

即興で出した案に、彼女はコクンと小さく頷いた。かくして、俺たちはゆっくりと魔の領域へと踏み込んだ。当然ながら中は男の裸で溢れている。凄まじく描写しづらい光景だ。女である近衛に見せられるものじゃないな。

リオ「とーちやく。ここならだいじょぶだから」

スバル「ああ／＼／＼」

盲導犬のごとく、近衛を更衣室内にあるシャワーまでする。シャワーカーテンさえ閉めれば中の様子は見えなくなるからな。あと残念だが覗かないぞ。いや、マジで。さすがの俺も命が惜しいんだよ。

スバル「ジロー？」

ジロー「ん？ 着替え終わったか？」

近衛が着替え終わったのかこっそりと顔を出す。ついでにいうと、俺たちはすでに着替え終わってる。

スバル「ああ」

リオ「ロッカーに荷物入れるから貸せよ」

スバル「うん」

リオ「!？」

ロッカーに入れる為に近衛から荷物を受け取るリオだったが、荷物を落としかける。

ジロー「なんだ？」

リオ「いや、やけに重くて……な、なにが入って——」

なにが入ってるのか確かめようと軽く覗くと、中には拳銃やらスタンガンやら手錠やら……。

ジロー「じ、銃刀法違反ですよ、近衛サンッ!？」

スバル「ん? それは護身用のスタンガンとガスガンだ。本物じゃない」

近衛はガスガンを構える。

リオ「ホンモノじゃないのか」

……なんで、そんな残念そうな声を出すんだよ、リオ。

スバル「ただし、ばっちり改造が施してあるから急所に数発当てれば十分に人を殺傷できる」

ジロー「なんでそんなもん持ってきてんのっ!？」

スバル「なにを言っている。外出するときの必需品といえば、ケータイ、ハンカチ、拳銃。それが執事の一般常識だ!」

ジロー「それ、執事関係ないよねっ!？」

いったいどこの軍隊の常識だ。

リオ「スバル」

リオが真剣な顔で近衛を呼ぶ。これは説教か？

スバル「なんだ」

リオ「一丁譲ってくれないか？」

ジロー「なに言ってるの、リオ！？」

リオまでポケに回るのか！？ ワンワンスタイルを笑ったのをまだ根に持ってるのか！？

スバル「リオなら安心だ。あとでボクの最高傑作の物を渡そう」

ジロー「近衛もなに言っちゃってるの！？」

なにが安心なんだ！

リオ「サンキュ♪」

ジロー「近衛も渡そうとすんな！」

俺は三人分の荷物をロッカーに押し込む。もう嫌だ、遊ぶ前からなんかすげえ疲れた……。

リオ「……なあ、ジロー」

ジロー「銃刀法違反は禁止だ」

リオ「……違う。スバルのバックの中身、違和感なかったか？」

リオが小声で話しかけてきたから俺も小声で返す。

ジロー「え？ たしかに何か足りない気がするけど」

リオ「だよな。あれだけ護身用の道具があるのにあるべきモノがかけてるんだよな」

それは俺も思った。だけどそれがなんなのかわからなかった。

スバル「まだ行かないのか？／／／」

リオ「あ、ゴメン」

ジロー「行くからまた目を閉じてろ」

スバル「ああ」

近衛が早く行きたいオーラを出していたから、小さな違和感を振り払い、来たときと同じ要領で更衣室を脱出するのだった。

—ジロー side out—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056y/>

まよチキ！ダブル！！

2011年12月31日20時48分発行